
ADULT ONLY
R-18
あんな
おむつっ娘PARTY!7
おむつっ娘プチオンリー『おむ☆フェス7』開催記念合同誌

おむつっ娘Party!7

おむつっ娘プチオンリーイベント『おむ☆フェス7』開催記念合同誌


秋だ！
遠足に行こうぜ！
XL


あ！食べてすぐ寝た！
しようがないねぇ
オムツをかえてあげて、
ベッドに連れて行こう。


あんな

目次

<カラーイラスト>
3　星山カケル

5　中表紙
6　もくじ

<イラスト&漫画>
7　ジョン・マロ
8　うみノ爬虫類
9　日向あおい
10　瑞光ちのん
11　God Hand Mar
13　蜜姫モカ
17　ジョン・マロ

<小説>
21　ビアード
26　ラッセルヘッド
32　平野月子
40　スメルミコト

<フリースペース>
48　スメルミコト
49　ジョン・マロ
50　Feline Babies

51　おむ☆フェス6
　　アフターレポート
52　あとがき
　　・プチオンリーのれん
56　編集後記・おくづけ

表紙 / 蜜姫モカ
裏表紙 / ショタT督
のれん / 雛良

（敬称略）

おむつっ娘Party!7

おむつっ娘プチオンリーイベント『おむ☆フェス7』開催記念合同誌

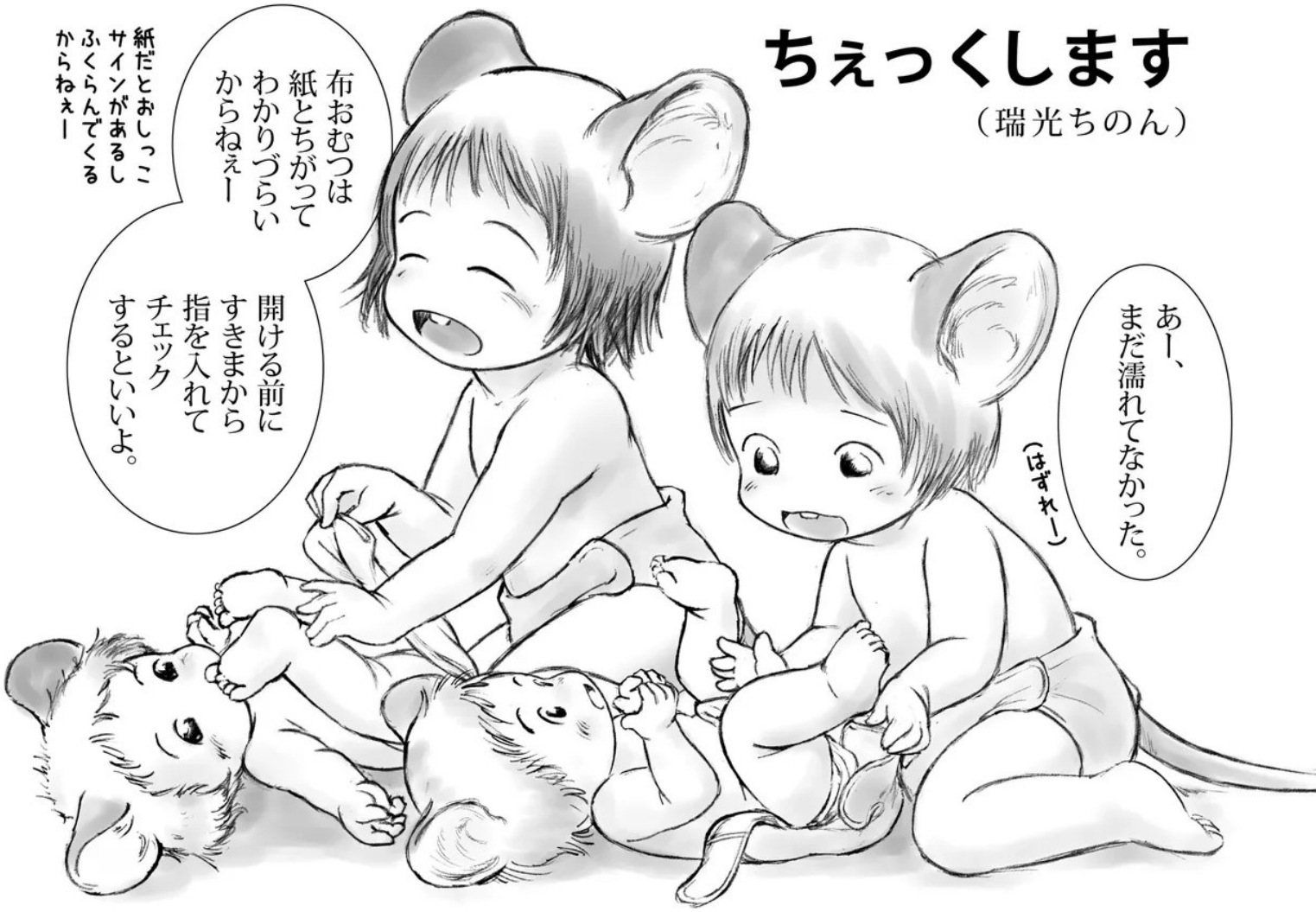

ずっこいよ♥




チェック
お願いしまーす
はーい
先輩、リモートでも
スーツで偉いっスねぇ
んー？何かコレが
落ち着くというかね…
実は下はパジャマ
なんじゃないスか？w
うっ!?
ぷる…
アレ？図星っスかw
さあ…どうで
しょうねぇ…
しょろろろろ…
ぷる…
（ああ…出てる…
後輩見てるのに
おしっこ出てるぅ♥）

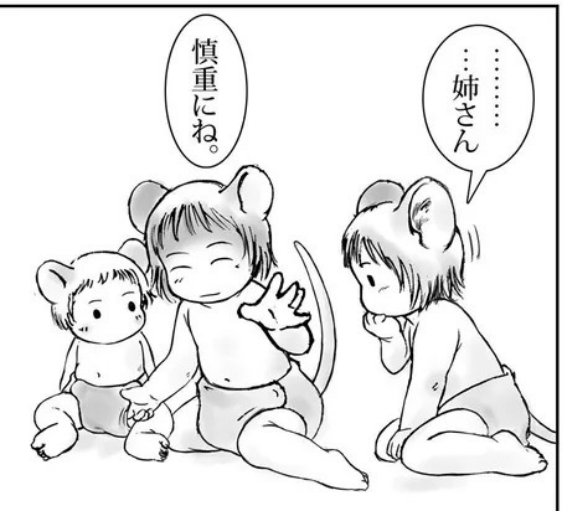
ちぇっくします

（瑞光ちのん）









権力による超法的制裁
～カースト上位からの落第～




「はぁ…はぁ…ママ……もうウンチしていい？」
『よく我慢できたわね。もうウンチをして良いわよ』
「うん！　んあっ…あはぁぁぁ……」
『さてと……二人が馬鹿にしてたともかちゃんよりも先にウンチを漏らした気分はどう？いい年してウンチもろくに我慢できないあなたたちの方こそ学校に行かない方がいいわよ。教室がウンチ臭くなったら大変だもの。二人は学生より赤ちゃんの方が似合ってるから、学校を辞めて保育施設に通いなさい。そしてオムツの赤ちゃんからやり直すのよ。親御さんには私から言っておくから安心しなさい。一応言っておくと、私は〈そういうこと〉ができる権力を持っているの』
「ママ～、ウンチ全部出たぁ」
『あら、ウンチもちゃんと我慢出来てご報告もできるなんて、ともかちゃんはホント偉いわね』
「えへへ～」
『それじゃともかちゃんは隣のお部屋でキレイなオムツに取り替えましょうね』
「うん！」
『そこの二人は何もできない赤ちゃんになったことを自覚するために、明日の朝までウンチまみれの気持ち悪いオムツで過ごしなさい。ともかちゃん、悪い子たちをベッドに閉じ込めちゃうからお手々をそこから離してね。挟むと痛い痛いだからね。
「は～い」
『これからも学校でなにかあったらすぐママに教えてね。ともかちゃんはママが守ってあげるから』
「うん！　ママ大好き！」


ねぇ…君っ…また何か用？
新しいおもちゃ…？
もぉ…そんなことしてる暇ないでしょ!!
そんなことばかりしてるから
前も部長に怒られてたじゃない…!!
ちょっとは真面目にやりなさいよ!!
OMORASI.EXE
おもらし量
0.00ml

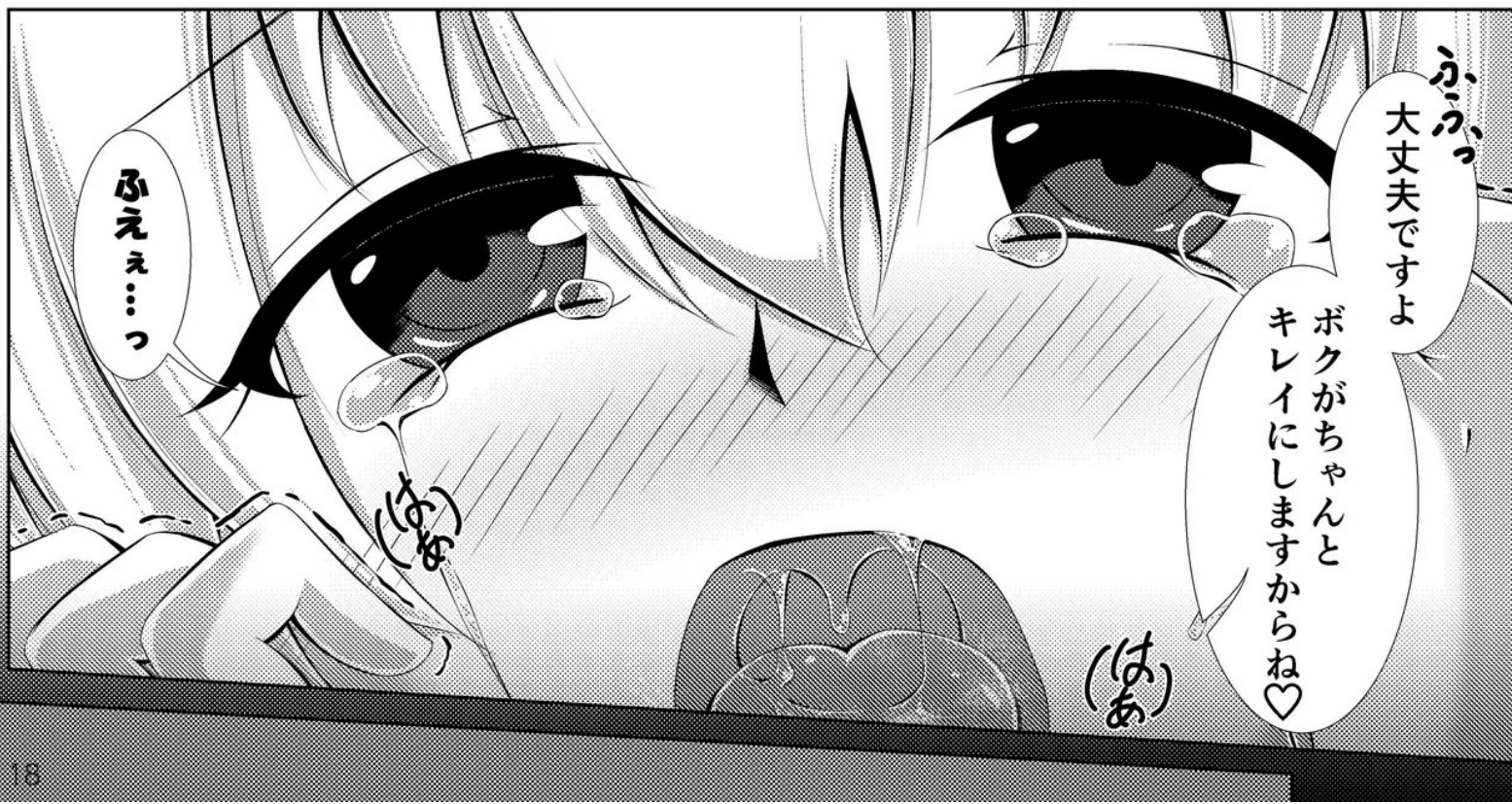

ちょ…っ!!
急に尿意がっ…!!
やだっ…ちょっと!!
とまらない…!!
だめっ…ヤダっ…!!
見ないでぇっ!!
とまってぇ…
えーーっ!!
ちょっと先輩何してんすかぁ～?
くっさ…量もエッグいすねぇ…
OMORASI
power
830pt
ぴちょちょちょ
ぽたたたた♡


昨日はひどい目にあった…
念のため紙おむつしてきたけど
今日は大丈夫よね…
モコ
モコ


先輩どうしたんすかー？
急に会議室に駆け込んで…？
あっ…また漏らしてる！
やっべ～！
量すごすぎでしょ笑
オムツしてたんすか～？
あんま意味なかったですねぇ!!
滝みたいに漏れてますよ!!
ウケる～！
ヤメてぇ…
やめ…
やめてぇ…
見ないで…
見ないでぇ…っ!!
うっ…
はあっ…
だめぇ…
いっ…クッ…♥


チュン
チュン
ンヤーー
おはようございます
未紀お嬢様！
CHERRY
モソ
モソ
いいってば…
今日は、自分で…
ダメですよ？
お嬢様のおむつ替えは、
ボクの役目なんですから
うぅ…っ
あ、ぅ…
おはよ…芽…
さぁっ
ちっちでいっぱいの
おむつ替えますね
隠して隠して大好き！
ボクっ娘メイドとおむつっ娘お嬢様の
あまあまモーニング
ジョン・マロ


じゃあ
いきますね♪
プチン
やっ！
ま、って…！
！
あらら～
お願い…
見ないでぇ…っ
(はあ)
いやぁ…っ
(はあ)
CHERRY
むわぁ…
ぐしょっ
大っきい方も
しちゃったんですね
お嬢様？


ふぅっ
大丈夫ですよ
ボクがちゃんと
キレイにしますからね♡
(はあ)
ふえぇ…っ
(はあ)


――本日は、
お父様の会社にて
懇親会へのご同席の
予定がございます
いっぱい
しても
大丈夫です！
さわ
さわ
カサッ
なので、
おむつと尿パッドを
併せて頂きますね
……


ねぇ、芽…
私、このままで
いいのかな？
やっぱり…
……
■才にもなって
おむつしているのが
気になりますか？
…うん


……ボクは
大人の社交場で
認められるために、
お年以上に
振る舞うお嬢様を
知っております
一方で、子供のままで
ありたいと言うお望みに、
大好きな
お嬢様のため
ですから！
ボクはどこまでも
お付き合いするつもりです
トクン……
……っ！
芽がそう言うなら、
…くすっ
もうずっと、
このままで
いいかな…♡
きゅっ
FIN

見習い魔導師はおむつが取れない

ビアード

小さな村の小さな宿屋。私はそこで一つの大きな決意をしました。そして私はその決意を胸に、ベッドから起き上がったのです。

「おはよう、サーニャ。よく眠れたかしら？」

「はい、勇者様。とてもよく眠れました」

私の返事を聞くと、勇者様はにっこりと笑ってくださいました。それから私達は軽く支度をして、二人で朝食を済ませると、宿屋を後にしたのです。

「それじゃあ、装備を調えたら出発するわよ。はい、今日のお小遣」

そう言って、勇者様は私へ金貨が入った小袋を渡してくださいました。

「サーニャが気に入った装備品や薬を買っておいてね。後は、いつものやつも忘れないように」

「はい。ありがとうございます、勇者様」

私は勇者様からお小遣を受け取った後、村の市場へと足を運びました。そこで使い勝手の良さそうな杖や、着心地の良さそうなローブを買いました。お古の杖やローブは売って、それも少し足しにしました。

後は、私は一応魔導師なので、用心のためにＭＰを回復する薬もいくつか買っておきます。

「……これぐらいで、もう良いかな……」

小袋の中には、まだお小遣がいくらか残っていました。ですが私はそれを使わず、小袋ごとポケットの奥へ押し込みました。

本当は、この残ったお金は……私のおむつ代でした。

この世界では、村や町以外には基本的にモンスターが徘徊しています。そしてそんな場所には当然おトイレもありません。そうなると、冒険中におトイレへ行きたくなってしまったら、その辺で済ませてしまうしかないのです。

ですが、屋外で用を足してしまうと、その隙にモンスターに襲われる危険が高く、実際にそれで命を落とす冒険者も多いのです。

そのため村や町では基本的におむつが売られ、冒険者達はそれを穿いて冒険に出るのが、近頃では普通になってきました。

しかし、おむつは生地が厚いために穿くと動き難く、それはそれでリスクになります。そのため、ある程度熟練した冒険者は排泄コントロールを身につけ、おむつを卒業していくのです。

しかし、まだ見習い魔導師でしかない私には、なかなか冒険中の排泄コントロールができなくて、冒険中は常におトイレの心配をしなくてはなりません。そのため、私が冒険へ出るにはおむつを穿くことが必須なのです。

勇者様もそれを分かってくださって、村や町を出る前には、私におむつを買うためのお金を与えてくださるのです。ですが、私は勇者様の

意向に反し、おむつを買わずに市場を去りました。

私には一つの小さな……夢があるのです。

勇者様はいつも、私のことを気に掛けてくださいます。だから、装備の新調もいつも私の分を優先してくださって、よほどお金が余っている時でないと、ご自身の装備は新調なさらないのです。

そのせいで、勇者様が使っている剣はいつまでも古いままで、それが段々と勇者様にとっても辛い状況になっていました。ここのところモンスターも力をつけているようで、古い剣ではモンスターを一体倒すのも少しずつ大変になってきているのです。

だから私はおむつを買わずに、おむつ代を貯金して、いつか貯めたお金で勇者様に新しい剣をプレゼントしたいのです。しかし、まだまだ駆け出しで膀胱も未熟な私が、冒険中におトイレを我慢しきれるのか、正直に言うと自信がありません……。

でも私は、これ以上勇者様のお荷物にはなりたくない……だから私はこの日、大きな決断をしたのです。私はおむつを卒業して、それで貯めたお金で勇者様に新しい剣を買ってあげるのだと。

買い物を済ませた後、私は勇者様のもとへ戻り、村を出発しました。

次の目的地は平原を越えた先にある大きな町です。私は勇者様の後ろをついて歩き、勇者様は時折現れるモンスターをなぎ払いながら、私を先導してくれました。

私も時折、勇者様の後ろから魔法で援護し、時には勇者様の傷を魔法で癒やしました。しかし、町への道のりは思った以上に長く、気が付くと私はまだ道半ばだというのに、もうＭＰが尽きかけていたのです。

「サーニャ、まだ道のりは長いわ。薬は買っているんでしょ？　今のうちにＭＰは回復しておいた方が良いわ」

「はい……そうですね」

勇者様はそう仰いますが、私は少し戸惑いました。だって、薬とはいえこれも飲み物ですから……あまり飲み過ぎると、おしっこが近くなってしまいます……。ですが、魔導師である私がこんな場所でＭＰ切れにでもなれば、それこそ一大事。私は意を決し、薬を飲み干してＭＰを回復しました。

それから、再び町へ向かって二人で歩き続けました。しかしやはり、薬を飲んだ影響か……段々と、おしっこがしたくなってきました……。

ですが、まだ町までは遠く、この辺りにおトイレなんてあるはずもありません。それに、辺りにはチラホラとモンスターの影も見え、下手に草むらなどに立ち入るのも危険でした。

かといって、勇者様におしっこがしたいことを打ち明けたら、おむつを買わなかったことがバレてしまいます……。

私はどうにか、次の町までおしっこを我慢し

ようと頑張りました。でも、まだ冒険者として未熟な私には、モンスターとの戦いを繰り返しつつ、おしっこを我慢し続けることなど、到底無理だったのです。

そもそも、おむつを買わなかったから、今私はローブの下に何も穿いてなくて……そのせいで、下が冷えるのもあって、余計におしっこが近くなるのです。

次第に我慢できなくなってきて……気が付くと、ローブの中で少しばかりおしっこをチビってしまいました……。その頃になると、私ももうパニックになっていて、もう無理……限界……そんな言葉ばかりが頭の中をよぎって……気が付くと、泣き出してしまいました……。

「サーニャ？　どうかしたの？　何処か痛い？」

私が急に泣き出したから、勇者様が心配して私の方へ近寄り、抱きしめてくれました。

「勇者様……わたし……」

「大丈夫よ、私がそばに居るから。だから何があったか、私に教えてサーニャ」

とても優しい笑顔で、勇者様はそう言ってくださいました。だからこそ、本当のことを言いづらかった……でも……もう、おしっこ我慢できなくて……私は、勇者様に本当のことを……伝えました……。

「ごめんなさい、勇者様……お、おしっこ……もう……がまんできなくて……っ！」

「おしっこ？　おむつはどうしたの、サーニャ？」

もう、これ以上私には隠し事なんてできなくて……私は、勇者様に全部正直に話しました……。

「そっか。私の事、気遣ってくれてたんだね。それじゃあ、サーニャのこと叱れないわね」

「勇者様……」

勇者様はそう言って、ただ優しく私の頭を撫でてくださいました。

「ねえ、サーニャ。もう少しだけ、おしっこ我慢できる？」

「は、はい……頑張ります……」

「サーニャは良い子だね。じゃあ、ちょっとだけ我慢して待ってて。すぐおむつを用意してあげるから」

そう言うと、勇者様は剣を抜いて私から離れました。そして勇者様は、スライムを見つけるとそれをあっという間に倒したのです。それから勇者様は倒したスライムの身体を剣で小さく千切ると、それを手頃な紙で包み、それを持って私のそばへ戻って来ました。

「ちょっと感触は悪いと思うけど、少し我慢してね」

そう言って勇者様は、ご自身の荷物から替えのおパンツを取り出して、先ほど紙に包んだス

ライムの塊をクロッチへ貼り付けるように載せ、私に差し出しました。

「さあ、これを穿きなさい。この中なら、おしっこしても大丈夫だから」

「は、はい……分かりました……」

私は勇者様から、スライム入りのおパンツを受け取ると、すぐに両脚を通してお股のところまでズリ上げました。

すると、勇者様の言った通り、ぶよぶよしたスライムの感触とヒヤッとした肌触りがお股に張り付いて、とても嫌な感じがしました。でも、ここまで来て我が儘なんて言えません……。

「んんっ……！」

私は目を瞑り、意を決して我慢していたものをスライムのおむつへ解き放ちました。やがて、ローブの下からしょろしょろと小さいながらも激しい音が漏れ、おパンツの中に敷き詰められたスライムへと、おしっこが降りかかります。

初めは少しひんやりとしていたスライムの感触が、じわじわと暖かいものに変化していきました。ですが、意外にもこれだけ勢いよくおパンツの中におしっこを漏らしているにも関わらず、おしっこはただの一滴もおパンツから溢れることはありませんでした。

それに、お股には未だにスライムのぶよぶよとした感触が残っていますが、逆におしっこで濡れたような感触がほとんどありません。どうやら、出したそばから、おしっこがどんどんスライムに吸収されているみたいです。

「ん……ふぅ……」

それから少しして、やっとおしっこ……いえ、おもらしが終わりました……。

「サーニャ、おしっこ終わった？」

「は、はい……」

「それじゃあ、それ捨てるから早く脱いで」

私は言われたとおり、すぐにおパンツを脱ごうとローブをたくし上げました。すると、すっかりおしっこを吸ったせいか、おパンツの中のスライムはさっきよりもぷっくりと大きくなっていました。慌ておパンツを下ろすと、紙の中に包まれていたスライムが、真っ黄色に変色していました。

こんなにたくさん漏らしてしまったのかと思うと、なんだか恥ずかしいです……。

「随分いっぱい出たみたいね。こんなに我慢して……辛かったでしょう」

「うぅ……は、はい……」

勇者様はおパンツから、黄色く変色したスライムを取り出すと、その辺に捨て炎の魔法で焼き払いました。

「あの……ありがとうございました、勇者様……」

「コツさえ分かれば、あれぐらいは誰でも作れるわよ。だから、大したことじゃないわ」

勇者様はそう言って、朗らかに笑っておられましたが、おもらし寸前だった私の前で、一瞬にしておむつを用意してくださった勇者様は、それこそ神様のようでした……。

「それにしても、スライムで即席のおむつが作れるなんて……考えたこともありませんでした」

「私も昔、先輩の冒険者から教えて貰ったのよ。私も駆け出しの頃はお金が無くて、おむつも買えなくてね。それで、スライムでおむつを作る方法を教えて貰ったの。意外と吸収力があって、割と多めに漏らしちゃっても全部吸ってくれるから、安上がりで本当重宝したのよ。まあ、穿き心地は最悪だけどね」

そう言って、勇者様はまた、にっこりと笑っておられました。しかし、ふと真面目な顔になり私の方を見てきたのです。

「サーニャ。剣の話だけど、サーニャが無理することないよ。剣なんていつでも買えるんだしさ」

私へ気を遣うように、勇者様はそう仰いました。しかし、それでは結局私が勇者様のお荷物になってしまうだけです……。

「ですが……その剣では、強いモンスターが現れた時に勇者様が不利に……」

「その時は逃げることだってできるし、無理に強い相手と戦う必要は無いわ」

私は、私のせいでこれ以上勇者様に迷惑を掛けたくない……そう言おうとしたのですが……その直後、勇者様はそっと私を抱きしめてきたのです。それで、私はびっくりして……何も言えなくなってしまいました……。

「剣はいつでも買えるけど、サーニャの命は買えないんだよ。だから、無理しないで。サーニャはまだ、冒険中のトイレを我慢するのに慣れてない。だからちゃんと、おむつを穿きなさい」

「うぅ……でも、いつまでもおむつの取れない魔導師じゃ……おむつ代ばかりかさむし……動きも遅くなるし……足を引っ張ってばかりで、迷惑になっちゃいます……」

「迷惑なんかじゃないわ。私は、サーニャと一緒に冒険を楽しみたいから、貴方とずっと一緒に居るのよ。だから、そんなこと言わないで」

そう言って、勇者様は私の頭を優しく撫でてくれました。それが本当に嬉しかったから……だから私、勇者様に言ったんです。

「分かりました、勇者様……私、まだまだおむつの取れない見習い魔導師ですけど……それでも、何処までも勇者様に付いていきます！」

「うん。よろしくね、サーニャ」

私は勇者様にぎゅっと抱きついて……絶対に離れないって約束しました……。

ずっとずっと……いつまでも……。

人幼ゲーム

ラッセル・ヘッド

薄暗い部屋の中にいくつも並ぶモニター。そこに映し出されていたのはどこかの幼稚園の様子だった。

二つの小さな教室と園庭。そのあちこちで、幼稚園の制服やスモックを身に着けた女の子たちが楽し気に遊んでいた。

しかしよく見ると、遊んでいるいる女の子たちは、幼稚園児ではなかった。仕草は幼稚園児そのものだが、高校生くらいか、中には成人しているのではないかと思えるような女性もいる。あるモニターに映し出された成人女性は、下着が見えても恥ずかしがる素振りすら見せず、大きく脚を広げて砂場で歓声をあげていて、その姿は若干異様でもあった。どの少女にもつけられたチューリップを意匠化した名札に名前はなく、ただ大きく番号だけが書かれていた。

別の画面に目を移すと、そこには教室の中で床に座って紙芝居を見ている少女たちがいた。不意に、その中の⑦の番号を付けた少女～年頃は小学校の中学年程度だろうか～が苦しそうに片手でお腹を押さえて、もう片方の手を挙げた。すぐにエプロンを着た幼稚園の先生が彼女の傍に行き、一言二言会話を交わすと、少女の手を引いて立ち上がらせようとした。痛そうに身体を丸めたときに見えた少女の首元には、白銀に輝く首輪がぴったりと嵌まっていて、首輪には小さなコネクタが見えるいくつかの穴が開いていた。苦し気にお腹を押さえ、体を丸めたまま動こうとしない少女を、先生が両脇を抱えて立ち上がらせた。急に脚が宙に浮いた少女は驚いて一、二度空中で足をばたつかせたが、無理やり立たされ、先生に手を引かれて廊下へと出て行った。

モニターが切り替わり、のろのろと廊下を這うような速度で進む少女の表情がアップで映し出された。苦しげな表情を浮かべた顔には脂汗と涙が浮かび、ついにお腹を押さえて手足を動かすこともできなくなった。次の瞬間、食いしばっていた口元が弛み、声にならない悲鳴がこぼれた。限界を迎えた体は最も力の入りやすい、お尻を突き出した姿勢を脳が指令したため、園児服の短いスカートから下着を自らの意思で晒すような無様な格好となってしまった。その無様な姿にさらにとどめを刺すように、突き出したお尻から派手な破裂音が響き、彼女のお尻を包んでいた下着～紙おむつがもこもこと膨れ上がっていった。

「ママ～っ！ママ～っ！助けて～っっ！もういやぁぁあっっ！私赤ちゃんじゃない！おトイレ行かせてぇぇっ！」

少女はもはや立ち止まることに意味がなくなったことを知り、泣きわめきながら、自分を捕らえている文字通りの魔の手から逃げようとするが、先生の手が緩むことはなかった。理性を手放した少女が泣き叫び、手を振りほどこうと暴れるたびに、お腹に力が入るのか、泣き声をかき消さんばかりの破裂音が廊下に響き渡り、おむつのお尻の部分に茶色いシミがうっすらと拡がっていった。

『はーい、7番内田まみちゃん、投票締め切りまでもたずにリタイヤでーす！これは罰ゲーム追加ですね～。まあ、初挑戦のお子ちゃまにはちょっと厳しかったかな？ゲームオーバーまであと4回チャンスがあるから、次頑張ってね～』

妙にハイテンションなナレーションをバックに、モニターの向こうでは泣き叫ぶ少女が先生に引きずられるようにして、廊下の奥の「おむつルーム」と書かれた部屋に姿を消していった。

「7番は予想通りでしたな」

「しかしこれほどあっさりとリタイアされてはつまらん」

「まあまあ、いい表情を見せてくれたではありませんか。何なら午後にまた出しても面白いかも知れませんな」

薄暗いモニター画面を眺めていた男たちが下卑た笑いを浮かべている姿がそこにはあった。

「あとは8番が確実ですかなぁ」

「いやいや、3番と12番でしょう。8番も怪しくは見えますが、あれは制御されたハズレではないかと」

「なんと。ベテランの方はそこまでわかりますか！」
男たちは酔いに濁った眼をモニターに戻した。
『まもなく今回の『人幼ゲーム』、午前の部のベットを締め切ります！一人脱落して十一人になってしまいましたが、このうち誰が子供のふりをしている偽物でしょうか？恥も外聞も捨て、最後まで幼児を演じ切り、誰にも気づかれなければ自由の身、通算5回見破られたら、マイクロチップに自分の意志まで奪われて、この施設内で飼われて壊れるまでご奉仕することに！チャレンジャーの運命は如何に！』
再び甲高い煽るような声がモニタールームに響いた。

園庭といっても、屋外ではないのだろう。四方を壁に囲まれ、天井にはいくつものライトが輝いている。②の名札を付けた少女は砂場にしゃがんで、その天井を眩しそうに眺めていた。
「ねーねー、ひとみせんせー、あれなぁに？」
一緒に砂でお山を作っていた⑧の名札を付けたグラマラスな女性が廊下の騒ぎを指さし、明るい声で傍にいた先生に尋ねた。
「うーん、誰か痛いいたーいになったのかな？」
「あーちゃ、いたーいのヤー」
痛いという言葉を聞いた瞬間、自分のことをあーちゃと呼ぶ8番の女性は砂が付いたままの手を握りしめて、顔を曇らせた。
「ゆーもたいたいヤー」
2番の少女～由衣も泣きそうな表情を浮かべて、砂遊びで汚れた手をスモックの裾で無造作に拭いた。スモックはあちこちに絵の具や泥のシミができていた。
『一人脱落、か』
泣き叫ぶ少女を見ても、由衣は表情一つ変えることすらなかった。過去に自分も三度、同じような目に遭っている。最初のうちはかわいそうという感情もわいてきたが、今回を入れても後二度しか自分にチャンスが残されていないこと、リタイヤするたびに少しずつ変えられていった自分の身体のこと、そしてリタイヤの後に行われる拷問とさして変わりない内容の罰ゲームのことを考えると、他人に同情している余裕などなかった。こうやって脱落者が出てくれれば、むしろ自分が助かる確率が上がるというだけだ。
「ゆーちゃん？」
「なぁに？ひとみせんせー」
由衣はできるだけ表情を崩さないようにしながら、小首をかしげて先生の方に顔を向けた。油断は禁物だ。少しでもおかしな素振りを見せたら、自分が破滅する。
「先生とちっち行こうか～」
「やー。ゆー、ちーないよ？」
由衣は視線を砂の山に戻して、砂遊びを再開した。
「ん～、でもぉ～、ほら、見て？」
先生にその場で立たされ、スカートの前をめくられると、由衣の眼には、くっきりと青い線が浮かび上がり、パンパンに膨らんだ幼児用の紙おむつが飛び込んできた。
「おむつさんが、『ちっちでてるよー』って教えてくれてるね。キレイキレイしに行こうか」
「はぁい…」
由衣は砂遊びに未練があるような声で返事をして、先生に手を引かれて建物の方へと歩いて行ったが、膨れ上がったおむつのせいでよちよちとしかできなくなっていた。由衣は水飲み場の蛇口で手を洗い、何のためらいもなく砂で汚れたスモックで手をぬぐい、先生に引かれていない方の指をしゃぶりながら、「おむつルーム」の方へと歩いていった。
廊下を歩く由衣の視線の先、廊下の突き当りに扉が見えた。幼稚園には似つかわしくないような、重々しい鋼鉄の扉。あの扉がこの施設に出入りする唯一の出入り口だ。監視の隙を見てあそこから脱出を試みる人間も何人もいる。だがそれは常にこのゲームに初めて参加した参加者だった。

脱走するとどのような扱いを受けるか。そして自分を縛り付けている枷がどういうものなのか。脱走を試みた時点で、人ではなく、モノ扱いになった実験体を使った説明会を一度でも見た者は脱走する気など起こさないだろう。説明会が終わった後、参加者全員が味わった、真っ赤に焼けた焼き鏝を肌に押し付けたときの肉の焼かれる音と臭いと悲鳴、そして自分の手に残る柔らかい肉が固くなる感触。そして、その説明会の場を最後に、脱走を試みた者と会うことは二度となかった。姿を消した者たちがどうなるかの説明を思い出した由衣は身震いし、おむつの中に恐怖の証が熱く拡がった。吸収量の限界を超えたおむつからあふれた雫が由衣の太ももを伝っていった。水滴が脚を水伝う不快な感触に思わず足が止まった。おむつが取れてない設定なので、朝からおむつにおしっこをしていた由衣だったが、今のは本当のおもらしだった。

「どうしたの？」

不意に足を止めた由衣の方へ先生が振り返った。

「あー…えへへへ」

由衣は脚をガニ股に開き、おむつからあふれて廊下にこぼれた小さな雫が作ったシミを見た。

「せんせー、ちー」

恐怖も羞恥も屈辱もかけらすら見せないようにして、由衣は少し照れたような笑顔を先生に向けた。

「あらあら、急いでおむつ換えましょうね～」

ぐずぐずに濡れたおむつから雫をまき散らしながら、由衣は高校生だった自分を記憶の奥底に閉じ込めて、3歳でトイレトレーニング前の幼稚園児になりきって廊下を走っていった。

誰も好き好んでこんな狂気のイベントに参加している訳ではない。皆参加しなければならない、何らかの事情を抱えているのだ。途方もない金額を闇金で借り破産もできないだとか、会社の金を億単位で使い込んで逃げているとか。由衣のように親の借金の形として売られた子供も幾人もいる。そんな追い詰められた人間に、救済として示されるのがこのゲームだった。

参加を「希望した」者は説明役の男から最初にゲームの説明を受ける。曰く、「ちょっとしたお芝居をして、金持ちの好事家に自分の正体が半日バレずに騙せれば、賭けの報酬として借金を消すことができる」と。そして、銀白の首輪を渡される。断ることも可能だが、ほとんどの人間は如何にも怪しいその提案を受け入れるしかない。受け入れなければ、人生が終わるだけだ。実際には首輪を嵌めたときに人として生きることが終わったことを知るので、それほど差はないのだが。首輪を嵌めると肌に密着するようにぴったりと絞められ、後ろで封印されるのと同時に細い針を打ち込まれる。一瞬チクリと痛みを感じるが、処置としてはこれだけだ。たったこれだけのことで、すべての面倒が片付くのかと拍子抜けするほどだが、もちろんそんなはずはなかった。

ここまでの処置が終わってから、ゲームのことが説明される。ゲームは十人前後の参加者で3歳から5歳の幼稚園児として半日過ごしてもらうもので、スポンサーは誰が園児のふりをしているかを賭ける。演技が気づかれなければゲームクリアで無罪放免になる。演じていると当てられたらチャレンジは失敗で、主催者からより園児らしく振る舞えるようになるためのアイテムがプレゼントされる。そして、五回目に失敗したらゲームオーバーとなる。当然演じている参加者がいれば、騙し役のプレイヤーも必要な訳で、時には騙し役としてゲームに参加させられる。

「騙し役になったら、本当に頭の中を園児並みに退行させて、動きもこちらでコントロールする。コントロールされてもその間の記憶は残るから、その間にレイプしたりとかってことはしないから安心しな。ま、体験してみればわかる」

こんな風にね、と男が手にしたテレビのリモコンのようなもののボタンを押すと、由衣の身体は受け身を取ることもできないまま、まるで糸の切れたマリオネットのように床に崩れ落ちた。立ち上が

ろうと手足に力を込めてもピクリともしない。倒れた拍子に打った頭と肩がズキズキと傷んだが、痛いと訴えることすらできなかった。

「瞼は動くようにしてある。さっき首筋に針を打ち込んだが、そのときにマイクロマシンを注入してある。それがリモコンの指令を脳と神経に作用させて、外部から身体の動きを任意にコントロールできるシステムだ。理解したなら三度まばたきしてくれ」

由衣は自分の身に起きたことが理解できず呆然としてしまい、その言葉が耳に入ってこなかった。

「まあ、いきなりじゃわからんか。少し体験させてやろう」

男がリモコンに指を滑らせると、由衣の身体がスムーズに立ち上がった。しかしもちろんそれは彼女の意志で、ではない。立ち上がると着ていた学校の制服を脱ぎ、笑顔で体操座りをさせられた。自分の身体が自分のものではなくなったことに由衣は恐怖した。

「感覚もコントロールできるようになっている」

その言葉が終わると同時に由衣の下腹部が膨れ上がった。実際に膨れた訳ではない。お腹が破裂するのではないかと思うほどの強烈な尿意が由衣を突如襲ったのだった。体操座りで窮屈になっているお腹を圧迫された苦しさに悲鳴を上げたかったが、身体の制御はそれすら許してくれなかった。尿意の限界を感じた脳が勝手に由衣の括約筋を緩めるが、膀胱にはほとんど何もたまっていないのでわずかに下着を濡らすだけで、苦痛から解放されることはなかった。

「元々は兵士のマインドコントロールや自爆テロのために開発されたシステムだから身体のコントロールだけじゃなく、痛みや空腹などの感覚も感情も制御できるようになっている。拷問用に痛みを強めることもできるが試してみるかね？イエスなら三回、システムを理解したから説明を終わってほしければ五回まばたきしたまえ」

由衣がこのときかろうじて五回まばたきできたのは奇跡だった。

由衣がおむつルームに入ったとき、先ほどの騒ぎの主の姿はそこにはなかった。既に罰ゲームの準備が始められているのだろう。もしも彼女の姿を見たら、過去の自分と重ねてしまって動揺するかもしれないので、その場に彼女がいなくて由衣はほっとした。

「ゆーちゃんもねんねしようね～」

おむつ替えのために敷かれた防水シーツをポンポンと先生が叩くのを見て、由衣はその上に寝転んだ。おむつの両脇を破られて、おむつの前側をを広げられると、由衣の鼻にもおしっこの臭いが届いた。ぐっしょりと濡れたおまたを念入りに拭かれると以前は思わず声が出そうになったが、今はその心配はなくなった。ずっと彼女の親指が口にくわえられたままだったからだ。それは彼女が声を出さないためにしていることではない。彼女に施された『参加賞』がそういう風にさせているのだった。

ゲーム終了後、参加者には小さなメモリーチップが渡される。そして、それを自分の手で、首輪に空いているポートへと挿し込まなければならない。もしも演技していることがバレていなければ、つまり誰も自分に賭けていなければ、何も起こらない。晴れて自由の身になれるということだ。当然コントロールされている騙し役にも何も起きない。演技者に誰かが賭けていれば、賭けられた金額に比例した時間、脳に直接様々な刺激が注ぎ込まれる。それは苦痛であったり、強すぎる快楽であったりと様々だが、どれほど訓練しようとも、どれほど心を鍛えようとも、人が生物である限り、直接脳に送られる信号から逃れることはできないらしい。そしてそのチップは首輪から外れなくなり、主催者から渡されるゲームの参加賞にもなる。首輪のポートは5つあり、すべて埋まると参加不可能、もうお終い、ということだ。さらに、このチップを差し込むとマイクロマシンのプログラムが起動し、自分の中の何かが壊れたり、頭の中身を書き換えられたりする。理性ではどれほど嫌悪していてもその行動を止めることはできなくなってしまう。もとは潔癖症気味でさえあった由衣が指しゃぶりがやめられなくなったり、泥だらけのスモックで手を拭いても気にしなくなったりするのは内心では嫌悪感でいっぱいだったが、それをやめることはできなくなってしまっ

ていた。だが、それくらいはまだマシだとも思う。私を止めてと泣きながら、それでも机の角に自分の性器を押し付けて自慰をするのがやめられなくなった同年代の参加者を見たときは、嫌悪と恐怖で吐きそうになった。

「それじゃゆーちゃん、たっちしてね」

由衣は片手をくわえたままごろりと寝返りを打ち、下半身裸のままでマットの上に立った。

「はーい、みぎー、ひだりー」

という先生の声に合わせて片足ずつ新しい紙おむつに脚を通していき、両足が通ったところでぐっと引き上げられた。

「ゆーたんしゅっきりー！」

由衣は頭の中の雑念を追い払い、笑顔で万歳しながら先生の両手にタッチした。実際、ぐっしょりと濡れたおむつから乾いた新しいおむつに替えられると、とても気持ちいい。そういえば昔、保健体育の授業で、子供のトイレトレーニングのためには下着が乾いていることを気持ちいいと認識させることが大事だと言っていたが、本当にその通りだと思う。

「ターッチ！」

笑顔で先生も答えたところで、チャイムが鳴った。

『本日午前の投票、終了でーす！さあ、今日は誰かクリアできたのでしょうか？いよいよこれから運命の瞬間です！』

例の甲高いアナウンスが園内に響き渡った。先生役たちはチャイムと同時に瞳から光が失われ、ぞろぞろと廊下の奥の扉の前で一列に並び、公開時間の終わった動物園のペンギンのように扉の向こうに消えていった。彼女たちもまた、制御されたロボットなのだ。それでも、まだ命があるだけマシなのかも知れない。もうすぐ由衣もあの中に混じることになるのかもと思うと背筋に寒気が走った。これからその審判が行われるのだ。

由衣の後ろで重々しい音を立てて、鉄の扉が閉じられた。六畳ほどの狭い部屋の中には様々な体液にまみれた二つの生き物が転がっていた。一つはまだ時折悲鳴を上げながらもだえ苦しんでいるが、もう一つの小さな身体はうつぶせでカエルのように両手足を広げたままピクリとも動かなかった。お腹がわずかに上下しているので、生きているのだけはわかる。あおむけに倒れて痙攣している方には、スモックの胸に①の名札があったので、自分の前にこの部屋に入れられた1番の参加者だろう。ということは、この動かない小さい方が恐らく廊下で泣いていた子だろう。めくれたスカートの下でむき出しになっている彼女のアナルには、由衣の握りこぶしはあろうかというようなディルドが押し込まれていた。あり得ないサイズに拡げられた肛門はもう二度とその機能を取り戻すことはないだろう。

「2番、4回目のチャレンジ。結果を確認してください」

そんな他人へのわずかな憐れみを打ち消すかのように、無機質な女性の声が部屋の中に響いた。正面の鏡はおそらくマジックミラーで、その向こうには自分たちを見て楽しんでいるスポンサーがいるのだろう。その鏡の下にある、小さな扉からガチャガチャのカプセルのようなものが出てきた。この中に入っているチップを自分で首輪に挿さなければならない。由衣は震える手でカプセルを開けて中のチップをつまんだ。自由か、絶望か。これまで3回、チップを挿し込んだときの記憶が湧きあがり、どうしても挿し込む手が止まってしまう。不安に怯え、ためらうその表情も鏡の向こうの連中からすれば余興の一つに過ぎないのだろう。自分ももはや人ではなく、足下に転がる二人と同じ、金持ちの生きた玩具なのだ。諦めが彼女の手を動かした。

カチリとチップがポートに嵌まった。シン、という静まり返った音が本当に聞こえた気がした。何も起きない。まさか。歓喜が腹の底から沸き上がった瞬間を狙ったかのように、それは起きた。

「あああぁぁぁあぁあっっっっ!!」

由衣を襲ったのは純粋な恐怖だった。

全身の毛穴が開き、脳が焼き尽くされた。闇を怖がる幼児のよう

に、ただひたすら「コワイ」という三文字が脳を埋め尽くした。親指をしゃぶることも忘れ、頭を抱え、必死で目を閉じ、身体を縮こまらせても、逃げることも守ることもできない。由衣はその場でしゃがみ込むと、目を押しつぶったまま這いずって壁際へ逃げた。そのときに、何か暖かく柔らかいものを踏んだり、ぬめぬめしたものが手に着いたりもしたが、今はそれどころではなかった。さっき替えてもらったばかりのおむつにありったけのおしっこもうんちも垂れ流し、本能に従って壁の隅に身体を押し付けて身を守ろうとする由衣の姿はあまりにも幼く、哀れで、そして観客からしてみれば滑稽であった。

「あああああああああああ…あぶぁぁぁぁぁぁ」

腰が抜けて立ち上がることもできず、壁に沿って身体を動かそうとするたびにおむつの中の排泄物がつぶれ、あふれだした汚水がスモックの裾にしみこんでいった。涙、鼻水、汗、よだれとあらゆる液体で顔は顔は濡れ、脳の処理能力がパンクしたせいで手足を動かすこともままならなくなった由衣はそのまま壁際に座ったまま崩れ落ちていった。

「2番、チャレンジ、失敗」

機械の音声が今更言うまでもない結果を告げた。

由衣が次に目覚めたとき、そこはいつもの寝床の中だった。広いコンクリート打ちっぱなしの部屋にベッドだけが並んでいる玩具たちの牢獄はいつも汗とアンモニアの臭いで充満していた。プライバシーなど何もない、その部屋で寝起きをし、エサを食べる。他の参加者もいるが、お互い話をすることもない。

目覚めた由衣は、おしりがヌルヌルしているのを感じた。そしておしりの肉の間に挟まる異物感。そっと布団の中に手を差し入れ、股を触ってみると、パンパンに膨らんだおむつのままだった。布団の隙間から漂う臭いからすると、やはりおしっこだけではなさそうだった。昨日のゲームの後、そのままで寝かせられたのだろうか。

そう思った由衣の枕元に「結果」と書いてある封筒が置いてあった。

「沢田由衣様　おめでとうございます。今回の参加賞は排泄のコントロールを完全に失う機能です。これであなたはもっと幼児に近づけました。次のゲームがラストチャンスですので頑張ってください。なお、これからあなたの下着はおむつになります。おむつが汚れたときは元気な声でお近くのスタッフにお知らせください」

封筒の中に入っていた紙を読み終わると同時に、おむつの中におしっこが勝手に流れ出てきた。どれほど力を込めてもそのせせらぎは止まることがなかった。むしろ、力を込めた分勢いを増し、さらにはおしりから熱い塊がぬるりと滑り出てきた。

「あ…♡」

お腹の中身がすべて出ていく感覚に由衣は初めて快感を覚えた。今までは濡れたおむつの感触が気になって、気持ちいいと感じたことはなかったが、排泄のコントロールを失った今、彼女の心はタガが外れて、トイレトレーニング前の幼児と同じように、排泄することにそのものを快感と捕らえるようになってしまった。

「まま〜！まま〜〜!!ゆーたん、うんうんでた〜」

布団をはねのけて笑顔で起き上がった由衣はぐっしょり濡れたおむつを自ら揉みしだき、部屋の中を嬉しそうに駆け回った。昨日までの何とかして生き抜こうともがいていた少女の面影はそこにはない。理性を手放し、退行という別の形でのゲームオーバーを迎えた哀れな少女がいるだけだった。

「ゆーちゃん、おむつ替えようね〜」

「は〜い、ままぁ」

両脇をスタッフに抱えられながら、笑顔で出て行った由衣の姿を、その後見た者はいない。

（完）

住み込みメイドさん募集しています【Dom/Sub ユニバース】

平野月子

うまくいかない日は、万事がうまくいかないものである。

朝、出社したら会社が倒産していた。入口に貼られた、倒産を知らせる貼り紙を見て『ああ、ついにか……』と諦めのため息をついた私は、そのままの足でハローワークへと向かった。

しかし、朝から閉庁時間まで粘っても目ぼしい求人を見つけることはできなかった。

仕方がないので、スーパーに寄って見切り品をいくつか買い込み、家に帰ったら……住んでいたアパートが全焼していた。

いやいや、まさか。そんなはずはない、と目を閉じゆっくり深呼吸してもう一度目を開いたけれど、やはり私の住んでいたアパート……最寄駅から徒歩二十五分、家賃月二万五千円、築年数はあんまり考えたくないくらいにおんぼろな文化住宅は、影も形もとどめておらず、そこには焼け落ちた骨組みが残されているだけだった。

会社に関しては仕方ない。最近、給料の振込も滞りがちだったし、こういう日も近いんじゃないかっていう気も薄々していた。というか、ここ三ヶ月程、まともに給料が支払われていない。未払いのお給料はきっちり受け取れるのだろうか。

それでも転職しなかった理由は、しなかったんじゃなくて、できなかったのだ。

それは私の二次性が原因だ。

この世界には、男女以外にDom（ドム）/ Normal（ノーマル）/ Sub（サブ）の三つの二次性がある。一番多いのはNormalで全体の七割くらいらしい。それ以外がDomとSubということになる。簡単に説明すると、Domは支配欲が強く、嗜虐的特性を持つ人が多い。Subの世話をしたり、躾やお仕置きをしたりすることを好む傾向がある。対して、Subは被支配欲が強くて、被虐的特性を持つ人が多い。Domを信頼し、褒められることが何よりの悦びであると感じる人が多い、らしい。

自分の二次性は、中学生のときの一斉検査で知らされる。

私、宮寺麻乃（みやでらあさの）はSubだ。今までSubの特徴といわれる欲求なんて感じたことはない。だけど、Subってだけで見下されるのが癪で、勉強もスポーツもずっと頑張ってきた。でもその頑張りが評価されたのは大学までだった。いくら『二次性による差別は禁止します』と偉い人たちが唱えたところで、社会に蔓延った偏見は消えない。

Domは社会的にも成功者が多いので優遇されることが多いけれど、Subに関しては、依存心が強い変態嗜好の持ち主だと長らく誤解されていたので、今でも社会的に偏見が残っている。おかげで就職先もなかなか決まらず、辛うじて雇ってくれた会社にしがみつくようにして働いてきた。それでも給料は普通の人よりかなり少なく、反して労働時間はかなり長めという、ほぼ違法な状態での勤務だったけれど。

「はーあ、早急にSub可の住み込みのお仕事探せって？そんな都合の良い仕事なんて……」

見切り品の入った買い物袋を握りしめたまま、がっくりと電信柱にもたれ掛かりぼやいたとき、ちょうど目の高さの位置に貼られた求人募集に気が付いた。

『住み込みメイド募集

月給　40万円～

条件：住み込み

勤務時間：8時間程度／1日

※Subの方優遇いたします

連絡先 080-〇〇〇〇-〇〇〇〇(高城)』

イヤイヤイヤイヤ。これ、絶対、電話したらダメなヤツ！　特に、Sub優遇だなんて、行ったら何か悪いことされちゃうに決まってる!!

そう思うのに、その貼り紙から目が離せない。

キャッシュカードは財布に入っているので、少しのお金なら引き出せるけれど、そもそも薄給の上、ここしばらくは給料の振込もなかったわけだから、当然貯金もない。今夜をネットカフェとかに泊まってやり過ごすのも不可能ではないけれど、次の仕事が決まるまでできるだけお金は使いたくない。

……ちょっとお話を聞くくらいなら……？

貯金残高を思い浮かべると同時に、心が少し揺らぎ始める。給料も今までのことを考えると破格だ。

……怪しいところだったら、すぐに逃げればいいわよね!!

自分に言い訳をし終える前に、私の手はスマホを取り出し、書かれている連絡先に勝手に電話をしていたのだった。だってお給料が魅力的すぎるのがいけない。どうかまともなお仕事でありますように。

勤務地が書いてないと気づいたのは電話を掛けてからだったけれど、呼び出されたのは幸いにも隣駅の住宅街だった。まあ、飛行機や新幹線を使うような距離の駅から離れた住宅街なんかの電信柱にチラシを貼ったりはしないか、と変なところで自分を納得させる。

電話で「今日、できれば今すぐ面接をお願いします」と先方の都合ガン無視で頼み込んだにも関わらず、相手は快く応えてくれて、しかも履歴書も不要とのことだったので、そのままの恰好で指定された場所に向かった。出勤のための服装だったので、多分装いはギリギリセーフ。ていうか、スーツを求められても燃えてしまったので、別日でもこの服で行くしかないんだけど。あ、化粧品とかもないや。今日を逃すと、余計に採用までのハードルがさらに上がる気がする。

怪しいとしか言いようがない求人募集だったけれど、後がないこともあり、ちょっとだけ気を引き締める。だけど、スーパーの見切り品が入った買い物袋を持っている時点で全て台無しである。いや、でも、今回の面接落ちたら、これを食べて食いつながなければならないので、これは大事な私の財産だ。

呼び出されたのは、駅からさほど離れていない閑静な住宅街に佇む小ぢんまりとしたお洒落な洋館だった。門から玄関までの小道の両側に見事なローズガーデンが続いている。

応接室で向かいのソファーに座った高城（たかぎ）さんは、雇い主の秘書で、おそらく私と同年代。二十代半ばくらいの爽やかな青年だった。

雇い主はここの主で、とある会社の社長をしているらしい。高城さんとは大学時代の親友だそうだ。親に譲られたこの家で一人暮らしをしているが、不規則な生活と忙しさに日常生活にまで手が回らず、今回、メイドを募集しようという話になったらしい。

本人は今日も多忙を極めているらしく、待ち合わせの時間に間に合わないということなので、私はこうやって高城さんの向かいに座って紅茶を飲みながらこの家の主人が帰ってくるのを待っているところだ。お替りが続いて、ちょっと水分でお腹が張ってきた気がする。私はティーカップをソーサーに戻すと、気になっていたことをようやく口にした。

「でも、なんでSub優遇なんです？」

若くして社長になった優秀なDomなら、お相手にだって困らない気がする。それなら、Subにこだわる必要なんてなさそうなのに……

「あいつはね、初恋こじらせすぎちゃって」

高城さんは、おかしそうに笑って言った。

「最近Glare（グレア）が安定しなくて仕事にも影響出るようになっちゃって。でも、プロのサービスは好きじゃないって言うし、それなら日常でほんの少しでも発散させる手伝いもしてくれれば助かるかなって」

不安定なDomというのはちょっと珍しい。Glareは四六時中まき散らすようなものじゃないので、二次性がDomだと分かったらすぐにコントロールを学ぶことになっている。

しかし、とんでもない変態エロ爺とかが登場することも想定していたけれど、話を聞いてみれば案外まともそうな仕事内容で安心した。

「それでは、実際雇用主さんともお会いして、お互い問題なければ、私は今日からでも大丈夫です」

「本当、ごめんね。あいつ、もうすぐ帰ってくると思うんだけど……」

高城さんが時計を見ながらそう言ったとき、ノックする音が聞こえ、その直後にドアが開かれた。

振り返って、相手を確認するより早く、ぶつけられる強烈なGlare。

ちょ、これはいくらなんでも……

GlareはDomがSubを支配するときに放つオーラのようなものだ。普通、そんなもの初対面でぶつけられることはないし、背後から不意打ちだなんて、通り魔に遭うようなものだ。しかもこんなに強烈なのを。

案外まともな仕事とか思っていた自分を蹴り飛ばして今すぐ逃げろと言ってやりたい。これ、絶対、駄目なお仕事だ……

強すぎるGlareに耐え切れず、私の意識はそこで途切れたのだった。

目を覚ましたら、知らない部屋のベッドで寝ていた。

えっとここは……？

ぼんやりする頭を押さえつつ、身体を起こして室内を見回す。オフホワイトを基調とした落ち着いた様子の室内には、今私が寝ているベッドと、ソファーとローテーブルのみ。ここはゲストルームだろうか。

私、なんでここに……？

状況がわからず媚を傾げたところで、ガチャリとドアが開いて、見知らぬ男が部屋に入ってきた。

「ひっ……!?」

いや、よく見たら、全く見知らぬ男……というわけではなかった。記憶の中の男性はもう少し若く、あのころに比べればちょっとやつれているようにも見えるけど。

「も、もしかして、藤堂晴臣（とうどうはるおみ）!?」

あまりの衝撃に、思わず指さしてフルネームで呼びつけてしまった。

「もう起きたのか。久しぶりだな。……あの、さっきは悪かった……」

部屋の入口で、ドアを閉めた藤堂にがばっと頭を下げて謝られた。

さっき……。その言葉に、意識を失う前に何があったのかを思い出す。

「帰ってきたら、宮寺が居て、びっくりしすぎて思わず暴走しちまった……身体は大丈夫か？」

顔を上げるとバツが悪そうに言われた。先ほどの酷いGlareは故意ではなく、本人が制御できない暴走事故だったらしい。なんと迷惑な。あんなこと、仕事中に取引先にでもやらかしたら大問題になること間違いなしだ。もちろん、路上でやらかしたら警察沙汰にだってなり得る。

「身体は……大丈夫だと思うけれど……」

言われてから改めて自分の様子に注意を払ってみるけれど、気を失った割には、頭が痛いとか気持ちが悪いとかいう不調はなさそうだ。

「ならよかった」

「そう思うなら、ちゃんとGlareのコントロールできるようになってくださいね」

「なんで敬語？」

「雇用関係があるから？」

「ここで働いてくれるのか!?」

前のめりに聞かれてびっくりした。

「普通なら、あんなことされたら逃げ出して当然だけど、……高校の同級生のよしみでしばらくは働いてあげるわ。仕事は今日から……でいいのかしら？」
「だいたいの事情は高城から聞いた。今日はここに泊って。仕事をするのは明日からでいい。倒れる原因作ったのはオレだし……仕事始める前に、まずはセーフワード決めてしまっていいか？」
セーフワードを決めておくと、Sub はその Dom からの支配をはねのけることができるようになる。それから一定時間、Sub に対してその Dom の Glare は無効になる。
「いつも使ってるセーフワードは？」
「そんなものないけど」
「え？」
「だって、Play（プレイ）なんてしたことないもの」
「えっと、宮寺って、Sub だよな？」
「そうよ」
「なんかすっごい強い薬を常用してたりとか……」
「ないわ。今まで欲求がなかったから、必要なかっただけよ」
Glare 不感症なんて言葉があれば、まさにそれだと思う。全く感じないのではなく、ちょっと鈍いだけらしい。おかげで今まで街中を歩いていて通りすがりの他人の Glare に当たられるような事故とか、抑制剤や安定剤なんかとは無縁に暮らしてきた。お財布に優しくて大変良い。そんな私の意識を一瞬で奪った先ほどの藤堂の Glare はちょっと規格外といってもいいかもしれない。
「ええと、じゃあ……ジャムパン、とかでどうだ？」
「別にいいけど。なんで、ジャムパン？」
「高校の時のあんたの昼食、だいたいジャムパンだった」
「よく覚えてるのね」
いつもクラスの中心に居たような男が、教室の隅でひっそりと過ごしていた女のことを覚えているなんて意外だった。
「だって、宮寺、頭良かったし」
「学年主席に言われても嬉しくないわ」
「お前に抜かれないように必死だったからな。でも、宮寺はアルバイトしながらだっただろ？」
二次性が判明してから、養父母と私の関係は微妙になった。養父母は古い考えの持ち主で、当然のように Sub にも偏見を持っていた。だから、私は高校入学と同時に家を出た。それからずっと、極力義父母には頼らず生きている。
高校のクラスメイトと言っても、当時、私たちには交流はない。私は特待生で授業料全額免除のため、好成績を取る必要があった。だからたくさん勉強をした。にもかかわらず、学年主席はいつも藤堂。私はどんなに頑張っても二位だった。それでも特待生の要件は満たしていたので、彼に対して何か恨みがあるというわけでもない。
「えっと、近寄っても大丈夫か？」
先ほどの Glare の影響を気にしてくれるらしく、遠慮がちに発せられた言葉に私は頷いた。
「なあ、宮寺。ちょっと試しに Glare と Command（コマンド）、使ってみてもいいか？」
至近距離から私を見下ろした藤堂が、少し考える素振りをしてから言った。
「Glare が不安定で制御できないんじゃ……？」
「いや、大丈夫だ。さっき緊急抑制剤も飲んだから暴走することもないし、弱い物しか使えないが……」
それだと私には効かないかもだけど、と思ったけれど口には出さなかった。効かなかったら、抑制剤の所為にでもすればいいかと気楽な気持ちで頷き、私はベッドを出て立ち上がった。
「不快に思ったら、すぐにセーフワード使っていいから」
藤堂に見つめられて、ゾクッと身体の奥から得体の知れない震えが起こる。

それは普段の私なら関知しない程度の Glare。でも、藤堂の Glare はなんとなくわかる。私を支配しようという意図をもって発せられたものだと脳が認識した。

「高城さんが、藤堂は初恋こじらせて Glare を制御できないって……」

ふわふわした気持ちのまま、先ほど聞いた話を口にしてしまう。

「オレはあの頃から、お前を跪かせて甘やかせたかったんだ。でも、宮寺は優秀だったから、ずっと Dom だと思ってて、手が出せなくて……でも、Sub だっていうなら……」

それは、藤堂の初恋の相手っていうのは……

「宮寺、Kneel（ニール）」

私が口を開く前に発せられた Command に、私は藤堂の足元にぺたんと座り込んだ。いわゆる女の子座りをして、膝と膝の間に手をつく。一般的には Sub の服従姿勢と言われているポーズだ。

初めての Command に頭がぼうっとする。命令通りにちゃんとできているのか不安で見上げると、藤堂の優しい目がこっちを見ていた。

「上手にできてて偉いよ。Good Girl（いいこ）」

私の前にしゃがみこんで、藤堂が頭を撫でた。目を見て褒められ、嬉しさがこみあげてくる。もっと命令されたい、褒められたい……支配されたい。きっと私は物欲しげな顔をしてしまっている。

「お前、弟を養ってるだろ？」

藤堂の口から発せられたのが Command ではなかったので、咄嗟に意味が理解できず、私は首を傾げた。

「お小遣いを渡しているだけ……」

ふわふわする頭でなんとか説明しようとする。

年の離れた弟は Normal だった。小学校の頃、両親を事故で亡くした私たちは叔父夫婦の家に引き取られた。養父母たちは善良な人達で、両親の遺してくれたお金はちゃんと管理してもらえていたし、二人から虐められるといったこともなかった。

私が Sub なのは私の所為ではないけれど、養ってくれる家を出たり、両親の遺産を全て弟に譲ったりしたのは私の自分勝手。私の稼ぎじゃ弟を完全に養うことなんてできないから、お小遣い代わりの仕送りを毎月しているくらいだ。

でも、こんな話、今までしたことはない。学生時代の知り合いで、両親が既にいないことも、私が Sub だと知っている人もほとんど居ないはずだ。

「宮寺は、今まですごく頑張ってきたよな」

優しく髪を撫でられて、心の奥底がざわつく。

「……そんなこと、ない」

自分より格下の Dom に跪くのが嫌で、ずっと意地を張っていただけなのに。唯一、私が勝てなかった Dom の Glare が心の奥底に眠った澱みを溶かしていく。

「どんなことにもくじけず、ずっとずっと偉かったな」

強がっていただけの学生時代。社会に出てからは、Sub というだけで認めてもらえなかった様々な実績。心の奥に少しずつ積もっていった辛さに気づいてもらえて、気持ちが溢れそうになる。

「何？　言いたいことがあるなら全部吐き出していいよ。宮寺、Say（言って）」

「頑張ってたんだもん……今まで、ずっとずっと頑張ってたんだもん……誰にも認めてもらえないのはつらかったよぉ……」

「ちゃんと言えていい子だな。可愛いよ。ああ、赤ちゃんから育てなおしてぇ……」

Command に対する Reward（ご褒美）が与えられて、私は藤堂に抱き着いて泣きじゃくった。呟くように付け加えられた藤堂の言葉は、最後までは私の耳に届かなか

った。

頭がぼんやりする。

いつ寝て、いつ目覚めたのかもわからない。いや、今の私の意識が夢なのか現なのかもあやふやだ。ただ、直前まですごく気持ちのいい、心から安らげる場所に居たことを覚えてる。ずっとずっと昔、まだ両親が健在で、私もただの甘えん坊の子供だった頃みたいな温かさに包まれていた気がする。

「ん……」

「宮寺、おかえり」

思ったより近くで声が聞こえて、私の意識は一気に覚醒した。

「とととと藤堂!?」

私はどうやら、先ほどとは違う部屋のベッドの上で、藤堂にぴったりと抱き着いていたようだった。先程の生活感のない部屋とは違って、机や本棚等があり、日頃から使われている様子が垣間見える。どうやらここは、藤堂の私室のようだ。

慌てて腕をほどいて、距離を取る。思った以上に広いベッドだったようで、勢いよく後退っても、私がベッドから転げ落ちるようなことはなかった。

「Space（スペース）に入ってたよ」

SpaceというのはDomに満たされたSubがなるお花畑状態のようなものだ。ただ、余程お互いに信頼関係がないと起こらない現象で、そう頻繁に発生するものではない。

「初めてのPlayでSpaceに入れるなんて、偉いね」

よしよしと頭を撫でられて、羞恥に顔が赤らむ。先程は恍惚としながら受け入れていた行為だけれど、Glareなしにされるとただ恥ずかしくて思わず目を伏せた。その時、自分が着ている服がここに来た時とは違い、何故かパジャマになっていることに気づき、軽く悲鳴を上げた。

「こ、こ、これは……？」

「んー、Spaceに入った宮寺が『身も心も全てご主人様のものになりたいにゃー』状態になったから着替えてもらった。覚えてねぇ？」

ニヤニヤしながらこちらを見ている藤堂を軽くにらみつけたが、微かな記憶の中で、確かに泣き止んだ後に、信頼できる誰かに全力で甘え倒していたような気がしないでもない。

「なぁ、宮寺。オレ達、パートナーにならねぇ？」

羞恥に見悶えながら、全力で自分に都合の悪い記憶を抹消しようと格闘していると、唐突に言われた。

「相性もいいみたいだしさ」

「……藤堂のこじれた初恋も実るし？」

「ああ」

「パートナーはいいけど、恋人は保留で」

DomとSubのパートナーは必ずしも恋人同士である必要はない。

「なんで!?」

「いやいや。高校時代から、私たち言葉を交わしたのは今日が初めてよ？　そこから一気に恋人兼パートナーとか、ハードル高いって」

「一回のPlayでパートナーにはなってくれたのに？」

自分が尊敬できないDomに跪くのは絶対に嫌だ。そして、私にとって尊敬できるDomというのは極端に少ない。だけど、藤堂に服従するのには嫌悪感が全くない。だから、パートナーになるのは忌避することではないけれど……

「じゃあ、お友達から始めましょう的な？」

「お友達というより雇用関係から始まりそうだけど。って、あー。この場合、雇用関係はどうなるの？」

「勿論、宮寺に不都合がなければ、最初の約束通りで。こっちはその間に口説かないといけないわけだし？」

そう言って、藤堂は私の肩をそっと押した。背中がシーツに触れた。

「なあ、一回のPlayでパートナーになってくれるなら、一回のセックスで恋人になってくれたりしない？」
「勤務初日からセクハラ？」
ベッドに倒れ込んだ私の上から覆いかぶさってくる藤堂を見上げる。
「雇用するのは明日からだし。だから、今日はまだただの元同級生ってだけの関係だし」
「ちょ、藤堂、Glare出てるっ」
先ほどのお試しのときに比べるとかなり強めのGlare。一瞬で脳が溶けていくような感覚がする。
「薬効きにくいんだよね、オレ。もう効果なくなったのかも」
不穏な台詞に、身じろぎする。
「逃げたかったら、セーフワード使ってもいいよ」
「藤堂、それはずるい」
辛うじて言葉を絞り出したけれど、藤堂のGlareに自分の中のSubの欲求が引きずり出されていくのがわかる。目の前のDomに支配されたい、尽くして喜ばせたい……
「せっかく捕まえたんだ。なりふり構ってられるか。……宮寺、Strip（脱いで）」
与えられたCommandに、私の指がパジャマのボタンを外していく。袖から腕を抜いたら、下着はつけていないようで素肌が現れた。藤堂の視線に身体が火照っていく。藤堂に腕を引かれて身体をベッドの上に起こした。
「Good Girl（いいこ）。次は下も脱いで」
心のどこかで、拒否しなきゃと思うけれど、そんな理性はGlareにぐずぐずに溶かされてしまった。言葉に操られるようにパジャマのズボンを脱いだら、お股の周りを包むのは布とは違ったかさついた手触り。不思議に思って見てみると、ショーツの代わりに私が履いていたのは紙おむつだった。
「ふぇっ……!?」
驚きのあまり、藤堂を見る。
「意地っ張りの宮寺を、赤ちゃんから育てなおしてやろうと思って」
ニヤついた顔の藤堂が、私の身体を引っ張って、自分の膝の上に横抱きに抱えた。
「わわっ……」
急に体勢を変えられてバランスを崩しそうになった私は、慌てて藤堂の首に抱き着いてしまった。
「かわいい……」
「藤堂、やだぁ……」
少しだけ戻った理性が拒絶の言葉を言わせたけれど、口からこぼれたのは自分でも驚くほどの甘えた声だった。
「嫌ならセーフワード。そうじゃなければ、Shush（黙って）」
与えられたCommandに、行為を拒否する言葉はもごもごと口の中に隠れてしまう。身体を支える藤堂の手が気持ちよくてすり寄ってしまいそうになる。
「いいこいいこ。じゃあ、次はLick（舐めて）」
唇の前に差し出された藤堂の指先に舌を伸ばしてぺろりと舐めた。しばらくペロペロと舐めて、なんか物足りない気になって、ぱくりと口に含んで吸い付いた。
「赤ちゃんみたいでかわいいよ」
私が舐めているのと反対の手でするりと頭を撫でると、おむつの隙間から素肌に触れられた。不埒な動きで肌の上を這う指先に、身体がビクンと跳ねる。直接触れられた部分がじんわりと熱い。
「そういえば、オレの帰りを高城と待ってる間、紅茶をたくさん飲んだんだって？」

指先をくちゅくちゅと口の中で舐めながら、私は頷いた。そういえば、あれからトイレに行っていないな、と頭の片隅で思った。藤堂の指先が、私の女の子の部分にもうすぐたどり着いてしまう。藤堂の掌の温度がただ気持ちよくて、逃げたいのか、待ち望んでいるのかよくわからない。両膝をすり合わせると、その場所がじわりと湿り気を帯びているのを自覚した。

「そろそろおしっこ、したいんじゃない？」

不意に耳元でささやかれた言葉にビクンと身体が跳ねた。

「んー、んーっ!!」

指を咥えたまま、首を横に振る。Shush（黙って命令）のCommandがあるので、言葉を発することができない。ふらふらと付近を彷徨っていた指先が、ぬかるんだ場所につぷんと入ってきて、私は目を見開いた。

「んーーーっ、んーーーーーー!!」

先程まで大人しくしていたもう片方の指も、口内をまさぐり始める。

ぐちゅぐちゅという水音が聞こえるのが、どこからかだなんて、考えたくない。快感とともに、先ほど自覚した尿意が一気に押し寄せてきて、ぎゅっと目をつぶった。

「おしっこしてもていいよ」

ぐりっと膀胱の近くを押されて、尿意が強まる。出したい。けれど、できない。

「ふぁっ……」

確かに尿意はあるのに、出そうとしても、身体はそれを拒んでしまって出すことができない。じわりと目の端に涙がにじむ。

「お漏らししちゃってもいいんだよ？」

耳元で優しく囁かれる、その吐息にすら身体が反応してしまう。

「宮寺が赤ちゃんみたいにおむつにお漏らししてるところ、見せて？」

出したい。出ない。出ちゃうって思うのに、出せない。藤堂の要求に応えたいのに、それができない。

「ふぇ、ふぁ……ふえぇぇえん」

ちぐはぐな心と身体に混乱しきってしまった私は、思わず子供みたいに泣き出してしまったのだった。

あの日、なかなか泣き止まない私を藤堂はひたすら宥めて、甘やかし続けた。日付が変わるころようやく落ち着いた私は、泣き疲れて眠りについた。そして、翌朝からは契約通り、この家で仕事をしている。

あれから一週間。今日の仕事を終えた私は、藤堂の部屋に向かって廊下を歩いていた。

自分でも、馬鹿な意地を張っているという自覚はある。でも、嫌なものは嫌なのだ。

――できないことを、そのままにしておくのが。

藤堂の前に来ると、軽く深呼吸してドアをノックした。

「何？」

しばらくして、部屋のドアを開けた藤堂が、訝し気にこちらを見ていた。

「リベンジしようと思って」

私が着ているのは、あの日と同じパジャマ。もちろん、その中にも同じものを履いている。

「私、できないことがあるのは、とっても嫌なの」

にっこりと笑いかけると、藤堂は熱の籠った目をして部屋に招き入れてくれた。

この後、私たちが恋人になって、宮寺麻乃が藤堂麻乃になるまでの物語は…

…またの機会にでも。

おわり

過教育

スメルミコト

「お、お願い……あなた。少しだけ、少しだけ席を外させて」
戸塚美智子は机に向かったまま、横から見下ろしている夫の顔を振り仰いだ。
「わた、わたし、もう」
「しつこい」
夫の進一は腕組みをして、妻の願いを撥ねつけた。
「何度言おうが駄目だ。問題を全部解くまで席は立たせん」
「だ、だって、もう限界よ」
美智子は尻を左右にゆする。小柄でやせ型の娘・優香が愛用している椅子に、四十女のふくよかな尻は、おさまりが悪かった。
「優香がそう言ったとき、おまえは許したのか？」
「あ、あれはあの子が、勉強から逃げようとしてると思って……」
「なら俺もそう思う。お前は逃げようとしているだけだ」
「違うの！　ほんとに、本当に、おしっこ……」
学習机の窮屈な椅子の上で、美智子は身をよじらせる。
だが、夫の冷たい目つきが変わることはなかった。

進一の妻、戸塚美智子はいわゆる教育ママである。
とはいえ美智子自身には大した学歴も、学問自体に対する興味もない。娘の成績を気にするのは、主に自分の世間体のためである。
だから美智子が高校生の娘の勉強を「見てやる」といっても、本人は高校時代の授業内容などとっくに忘れている。覚え方や解き方を伝授することはまったく出来ず、解くのが遅いだの、答えと違うだのと叱り散らすだけだ。進一が後から確認したところ、答えの書き方が違うだけで明らかに正解にもかかわらず、美智子の無知で模範解答と違うと長時間叱り続けていたことさえあった。それでは娘の意欲はますます低下してしまう。
進一は放任主義というか、学問はやりたい人が興味のままにやればよいという考えだ。実際に幼いころから好きな本ばかり読んで、教科書も学年が進んで支給される片端から読み終えてしまい、そのまま一流大学の受験をクリアしてしまった。娘についても勉強が楽しければすればいいし、関心が学問以外の事に向いたとしてもそれでかまわないと思っている。
そんな夫婦は娘の教育について噛み合っていなかったが、実際に家庭にいて娘に干渉しやすい状況にいたのは美智子だった。
先日、優香の成績が下がっていることに業を煮やした美智子は、机の前から離れないことを優香に強要した。トイレに行きたいといっても逃げ口上と決めつけて拘束し……ついに失禁させてしまったのだ。
娘に泣いて訴えられてその事件を知った進一は、美智子が許せなかった。
一目置かれたいという自分本位なプライドを満足させたいなら、美智子自身で何かの学問なり技芸なりを身につければいいのだ。妻を習い事に行かせる程度の経済的余裕は十分あるのだから。
自分は努力をせず娘をその道具にして、あまつさえ虐待まがいの

行為にまで出たことが、進一には許せなかった。優香が学校に行っている間、美智子が進学を求めている一流大学の過去問題集を突き付けた。「お前がやってみろ」と。

案の定、結果は惨憺たるものだった。

古文も英語もろくに読めず、数学はなんとかやれるのが大問1の単純計算問題だけ。物理や化学に至っては初歩的な用語の意味さえ理解していない。これでよく娘を責められたものだった。

それでも進一は、美智子に「分かるまでやれ」と言って机に拘束した。何時間でも席を立つことは許さなかった。

ガタッ。

美智子はついに机に鉛筆を放り落とし、立ち上がろうとする。

「どこへ行くんだ」

進一は美智子の肩を抑えた。

「離してえ！　おしっこ！　おしっこぉ！」

暴れる妻の肩をおさえ、進一は足払いをするようにバランスを崩し、無理やり着席させた。

妻の尻が椅子に激突する際、ドン！と音を立てたほどの勢いで。

その衝撃は、おしっこ限界女の膀胱には刺激が強すぎた。

「あっ」

妻のスカートに黒い染みが広がり、椅子の上にじわじわと水たまりが広がっていく。

「あ、あぁぁぁ……」

両手で顔を覆い、美智子は嗚咽を上げ始める。

「立て！」

進一は今度は妻を引っ張り、無理やり立ち上がらせる。

「何やってるんだ、四十にもなったオバサンが」

あえて侮辱的に進一は言った。

四十とは言っても、美智子はまだ美人の部類だ。それに年相応の肉づきで身体は色気を増していた。

若い頃ほどのペースはないが、今も美智子とはセックスレスではない。

そんな妻が、おもらし。

進一は性的興奮を自覚したが、それを口には出さなかった。

これは制裁だ。娘を虐待した妻への折檻なのだ。

おしっこを漏らした姿が魅力的だと伝えるわけにはいかなかった。

それでは失禁強要で与えた惨めさが削がれてしまう。

進一は妻に、椅子と床に洩らした尿を雑巾で拭き取るように命じた。

「まって、先にトイレ行かせて」

どうやら美智子は、膀胱の中の尿を全部もらしきってはいないようだった。確かに、思いっきり排尿したにしては明らかに量が少ない。

妻はまだ我慢している。そう進一は確信した。

「駄目だ」

「だって、出ちゃう、また出ちゃう」

そう言ってスカートの前を抑え、もじもじくねくねと腰を左右に振る妻。
「なら、良いものがある」
そう言って進一が差し出したものは、パンツタイプのおむつだった。
「あ、あなた、冗談よね？」
「優香を漏らすまでトイレに行かせなかったのは誰だ？　俺もお前をトイレには行かせないよ。さあ、床を拭いたら机に戻るんだ」
「おねがい、謝るから。優香にもちゃんと謝るから」
「言い訳はいい。最初に言ったはずだ。その問題をお前が自分で全部解けるまで、トイレには一切行かせない」
そう言って妻の目の前におむつを放り投げる。
美智子は何度もおむつと進一の顔を見比べていたが、やがて尿意に耐え切れなくなってスカートとパンティを脱いだ。
四十才の高慢なオバサンが、おむつを穿いた。
だが、その中に排尿する勇気は出ないらしい。妻はそのまま机に向かいながら、一問も問題を解くことなく何度も進一に「おしっこ」「トイレ」と願い出るばかりだった。
当然だろう。たとえ尿意に思考を圧迫されていなくても、美智子に大学受験の問題などろくに解けはしない。まして今の状態で、落ち着いて物を考えられるわけがなかった。
そのまま、ふたたび二時間が経過した。
「あなた、お願い」
美智子の膀胱には、先ほどおちびりした以上の尿がすでに補充されていた。
返事もせず、美智子の背後から手を伸ばし、膀胱のあたりを指でつつく。
「やめて！　出ちゃう！　出ちゃうからぁ！　あっ、あっ、あっ！　あああああああ！」
座ったままの美智子のおむつに怒涛の小便が流れ込んでくる。
硬く膨らんでいく吸収剤の感触と、妻の尿の温度を感じながら、進一は妻の股間をおむつ越しに撫でた。
美智子が全てを出し終わると、進一は言った。
「美智子、立ちなさい」
泣きべそをかいている妻の手を引いて、強引に立ち上がらせる。
連行先は、風呂場だった。
しゃくりあげるオバサンの尻を覆う、純白の紙おむつ。温かく膨らんだそれを、ふとももまで引きずり降ろす。
「さあ美智子ちゃん、脚あげようねえ」
十年以上前に娘を着替えさせていたときの言い方を、あざけりを込めてする。小便漏らしの中年女には相当の屈辱だろう。目に涙を浮かべて従う妻の脚から、おむつを引き抜いてタイルの上に置く。
妻の裸の股間を、ベッドでなく風呂場で見るのは久しぶりだった。
陰毛には露のように尿のしずくが付着しており、腰回り全体がじ

っとりと湿っている。
「いやっ！」
お尻の割れ目に指を這わせると、妻は腰をゆすって逃れようとした。
臀裂の中は、湿っているというよりヌルヌルと完全に濡れていた。たっぷりのおしっこが、大量に尻の割れ目に入り込んでいた。
妻のお尻をまさぐった指先を嗅ぐ。
おしっこ臭さの中にかすかな、だが間違いない異質な香りがあった。
うんちだ。妻の大便の匂いだ。
肛門の周囲に残った拭き残しのうんち。それがお漏らしをした小便で溶け、おむつの密閉空間で蒸された匂いだった。
思わずしゃぶってしまう。
「やめて！」
妻は顔を真っ赤にして叫んだが、それが欲情を招く。
クンニしたい。妻のおしっこまみれのアソコにしゃぶり付きたい。
その衝動を堪えて、進一はふたたび嘲りの表情を作って宣告した。
「明日、優香が学校に行ってる間に、あの問題集を全部解いてみせろ。終わるまで、お前はトイレ無しだ。」
美智子は泣き出した。
「おい、もうすぐ優香が帰ってくるぞ」
進一は時計を見ながら妻をせかした。
三十分ほど前からまったく問題が進んでいない。教科書を調べることは許しているのに、妻はそれも手につかない様子だった。
「あ、あなた」
「なんだ、また小便か。もう二回もしてるだろ」
「……」
さっきから何度かしているやりとりだ。
「言っておくが、今日できなかったら明日も続けてもらう。終わるまでお前はオムツ生活だからな」
絶望的なはずのその宣告さえ、美智子は聞いているのかいないのか、下を向いてぎゅっと目をつぶっている。
ガサガサッ。
紙おむつが椅子にこすれる音がした。
妻はふとももを擦り合わせているのだ。
だがその様子は、午前中に二回した小便漏らしの徴候とは微妙に違っていた。
ガタッ！
妻が強引に立ち上がろうとするのを、進一は無理やり椅子に押さえつける。
「離して！　はなしてぇ！」
火事場の、いや便所の馬鹿力とでもいうのか、美智子は夫の手を跳ね返して立ち上がり、その場で腰を覆っているおむつに手を掛けた。
「おいバカ、娘の部屋の床に小便するつもりか！」

そうではなかった。その回答は、妻の口からではなく、尻から聞かれたのだが。

ぶうーーーーっ。

教育ママの尻が鳴らした、あまりにも下品な音。

美智子は放屁したのだ。

ということは。

美智子がしたいのは……ここで、娘の部屋の中で垂れようとしているモノは……。

「バカなまねはよせ！」

進一は必死で、おむつを脱ごうとしている妻の手を抑える。

「だってえ！だってだってだってえええ！！」

幼児が駄々をこねるように美智子は泣き叫び、おむつをずり降ろそうとする。すんでのところで進一はおむつの尻側上部を掴み、ぐいっと持ち上げた。

美智子は首を左右にぶんぶん振りながら叫ぶ。

「出させて！　お願いだからオシリ出させて！　うんちしたい、うんちしたい！」

「馬鹿はやめろ！」

「嫌ぁぁぁぁぁ！　おしり、おしり出すぅ！　ちゃんとオシリ出してうんちするううう！」

だが、いくら進一の拘束を跳ねのけようとしても、しょせんは女の力――いや「大便がもれそうな女」の力では、男の腕力に敵うわけもなかった。

ぶりいっ。

「あっ」

異音。それが、揉み合い決着のゴングだった。

進一が掴んでいた、おむつを必死に脱ごうとしていた美智子の手から力が抜けた。

「あ、あ…あああ……」

やってしまった。

美智子は、もらした。うんちをもらした。

エリートの夫を持ち、成績優秀な娘の教育ママとして保護者の交友関係の中でも高い地位にいた美智子。

そんな美智子が、おむつの中に、大便のおもらしをしてしまった。

おむつ越しでありながら、かすかな匂いが両者の鼻に届き始めていた。

進一は美智子の後ろからその尻を観察して、

「うわ、おむつが茶色くなってるぞ。きたねぇなぁ～」

「いやあッ！」

慌ててておむつのお尻を両手で隠す美智子。

もちろん、おもらしが漏れないようにするのがおむつの役割である。そのくらいで色が染みだすはずがない。考えてみれば進一の嘘

だと分かりそうなものだが、そんな冷静さは今の美智子にあるはずもなかった。

茶色くこそなっていないが、美智子のおむつのお尻は、見た目にもわずかに膨らんでいた。

「見せろよ」

そう言っておむつに、さっきとは逆に脱がそうと手を掛ける。

「イヤ！　イヤッ！　イヤアアア！」

進一の手から逃げようと美智子は身をよじる。あれほど脱ごうとしていたおむつを今度は必死に抑え、なんとしても汚れたお尻を晒されまいとする。

だが、おむつを「降ろされない」ように美智子が必死に抵抗している隙に、進一はおむつをグイッと後ろに「引っ張った」のだ。動くのに支障がないように伸縮自在の材質で作られているおむつ。引っ張られたその中身は、容易に上から覗き込めた。

ゴルフボールほどの健康そうな便の塊が、おしりの割れ目に挟まっていた。軟らかすぎる下痢便でも、固すぎる便秘便でもなく、ねっとりと形を持ちながらもお尻とおむつにへばりついている。

たちまち凄まじい臭気が立ち昇り、夫婦の鼻を刺した。

「うわ、くっせえ」

わざと進一は大きな声をあげた。

「きったねえなぁ。糞なんか漏らしやがって。お前オトナなんだろ。ガマンしろよウンコくらい」

「う、うえええっ……えぐっ……うえええええええっ……」

幼児のように泣き出してしまう妻。

「と、トイレ、トイレ……」

ふらふらと部屋を出ようとする妻の手を捕まえる。

「離して！　もうトイレ行かせてよぉ！」

訴えながら太腿をもじつかている妻の腹を、ぐっと力を込めて手で押した。

「あッ」

ブブッ、ブリブリブブリッ。

さっきよりも長い持続的な破裂音とともに、おむつがひと回り大きく膨れ上がった。

やはりさっきのお漏らしでは、美智子はうんちを出し切っていなかったのだ。まだまだたっぷりと巨尻の中に溜まっていた残りの便を、必死に我慢していたのだった。

音の長さから察するに、さっきのゴルフボール大のうんちとは違い、今度は長いモノが一本丸ごと出てしまったに違いない。

進一は指先で、美智子のおむつ尻を突ついてみた。

「ヒッ！」

悲鳴を上げて体を反らし、妻はその指先から逃れようとする。指で押されたうんちが、お尻の表面にむりっと広がったようだ。

今度は手のひらで、押さずにそっと撫でてみる。

温かい。生温かいと言ってもいい。おむつ越しなのに、美智子の体温で熟成された大便の温かさが伝わってくる。

「あ、あなた。お願い、もう、許して。お願いだから」
密閉されたおむつの圧力でぎっちりと詰まった大便は、優しく撫でるだけでも尻肉に広がってしまう。
「何を言ってるんだ？　今度は糞もらしのお仕置きだ」
くそもらし、という屈辱的な言葉に、美智子の顔はトマトのように真っ赤になる。
「さあ、行くぞ」
「待って。こ、こぼれちゃう」
腕を引っ張っても、へっぴり腰の妻は思うように進もうとしない。それもそのはず。膨らんだおむつが一歩歩くごとに、たっぷん、ぼよんと揺れるのだ。
さっき撫でまわした分、おしり全面に広がってしまったうんち。それが揺れる感触は美智子にとってはオーバーに感じられ、うんちがはみ出すことが不安で仕方ないのだろう。
よろよろと歩く美智子の手を引いて、夫婦は目的の部屋にたどり着いた。
だが、今度の行先は風呂場ではなかった。トイレでもなかった。
夫婦の寝室だった。ベッドに腰掛けた夫を、美智子は不安げな表情で見つめる。
「後ろを向け」
「トイレに……」
「駄目だ」
「おねがい」
「駄目だ、後始末ならここでしてやる」
ここでしろ、ではなく、ここでしてやる。夫の答えはあくまで冷たく、美智子に屈辱を与えるものだった。
美智子はもはや抵抗もできず、進一に尻を任せるしかなかった。
ねちゃあっ……。
糊のような大便が粘着音を立て、おむつが尻肉から離れる。最初に漏らしたゴルフボール便とは比較にならない酷い悪臭が部屋にたちこめる。
膝上までずり降ろしたおむつの中に、山脈状のうんちが溜まっている。
妻のおしりと、妻のうんち。それを進一は見比べる。
山脈のような大便の形は、美智子の深々としたお尻の割れ目をそのまま象ったものだ。おむつを持ち上げてもう一度履かせれば、この山脈はお尻の谷間にすっぽりと嵌まり込むはずだった。
「あなた、早く拭いて」
妻が尻を左右に振って催促をする。
「よしよし」
お尻は肛門の周りだけでなく、いちめんにべっとりと茶色いものが付着している。
進一はティッシュを取り出し、大きな水晶玉か何かを磨くように、ゆっくりとていねいに妻のお尻拭きをした。

「ミっちゃんオムツにウンチして～♪」

「やめて！」

出来の悪い小学生がするような、稚拙な替え歌。

だがそれでも美智子の羞恥心を煽るには十分だったようだ。

そうしているうちに突然、美智子はぶるぶるっと尻を左右に振ったと思うと、急に腰を落として尻を突き出した。

「あ、あっ、あっ、出ちゃうう！」

ぶりいいいいっ。

教育ママが、再びうんち。

おむつの中の便が大量だったので全部出し切ったと思っていたが、どうやらまだ我慢していたようだ。

お尻拭きが終わって解放されるまでの辛抱だと思って必死に我慢していたのを、夫があまりにもゆっくり尻拭きを楽しんでいたので限界が来て、うんちしてしまったのだ。

新鮮なおもらしのうんちは、膝に掛かっていたおむつの中に落ちた。山脈の上に巨大な蛇のように大便が横たわる。

「やりやがったな」

「おね、おねがい。トイレ。トイレに」

「なんだ、さすがにもう出ないだろ？」

問われた美智子は黙ってうつむく。

「まさか、まだしたいのか？」

「……」

沈黙は肯定。ますます紅潮した妻の頬が、その解釈を補強していた。

「よしよし、じゃあお願いしてみろ。これを読み上げてな」

サラサラと何事かを書いて渡されたメモ用紙を見て、美智子は目に涙を浮かべる。が、観念してメモを音読した。

「あなた、み、美智子は、まだ、まだおむつの中に、うんち、が……したいです。どうか、もう一枚、おむつを履かせて、う、うん、うんち。うんちをさせて、ください……」

「よしよし。じゃあ、おむつしてあげようねぇ、美智子ちゃん」

「焦らさないで、お願い、もう」

懇願しながらも妻の尻が、ブッと短く放屁する。限界が近いらしい。

「出ちゃうのッ！はやくぅ！」

「よし、出していいぞ！」

その言葉と、おむつ尻が破裂音を立てるのは同時だった。

ブリュブリュと野卑な連続音を鳴らしながら、教育ママは、否、もう教育ママには戻れないだろう女は、床にへたり込んだ。

（終）

エロ分野ではスカ系の文字書きで「おむつ物」に挑戦したことはあまりありませんでした。
おもらし物は好きでしたので、今まで書いたパンティやブルマなどとの比較で、今回も何かしら――特に今回は専門の合同誌なのだから――コスチュームの特性を生かしたものにしたいとは思っていました。
それでおむつの特性を生かすとしたら

１．紙おむつの布よりも固めでゴワゴワした感触
２．もらしているのに外からは清潔なおむつと、開けた・脱いだ時の汚れが一気に見えるギャップ
３．普通の着衣より見た目が膨らんで見え、他人にバレるのではという不安感
４．幼児扱いされることの恥辱感

といった点があるかなと考えていたのですが、今回は密室での夫婦のプレイということで３は残念ですが次の機会ということになり、２と４に注目して、旦那さんが奥さんに懲罰としておむつプレイをするという話にしました。
次はぜひ、美智子さんになるかは分かりませんが「人前でバレないかと恐怖しながら、おむつに排便」する話を描こうかなと思います。

ちなみに美智子さんは最初「万智子」という名前でした。
万の智恵という名前の方が教育ママっぽく、かつやや古臭くて熟女風味が出るかなと思っていたのですが、例の歌で辱めるネタを思いついてしまって改名したものです。
目の肥えたおむつファンの方の眼鏡に叶うものが書けているか……という不安は持ったままですが、楽しんでいただければ幸いです。

気に入っていただけたなら、また何かの企画の折にでもお声を掛けて頂ければできるだけ参加させて頂きます。

スメルミコト
ツイッター：@ekimemoaka2019
ピクシブID：41696956
ファンボックス：https://smell-mikoto.fanbox.cc/

お読みいただき、ありがとうございます！

初めて『おむつっ娘PARTY！』に参加させていただきました、ジョン・マロです。

おむつやおもらしをしている美少女のイラスト・マンガを描いて、TwitterやPixivに投稿して活動しています。

今までは何気なく描いていた程度だったのですが、本当に描きたいものは何かと考えたとき、

“子供の頃から惹かれていたおむつっ娘・おもらしっ娘”

という答えだったため、本格的に活動を始めた次第です。

以後、お見知りおきをおねがいします♪

Twitter: @culimaro
Pixiv: 14598663



フィライン　ベイビーズ

Feline Babies

可愛い大人の赤ちゃんのための
ベビールックファッション

おむつカバー・布おしめ・ベビーハット・スタイ・ミトン・ロンパース etc...

■お取り扱い店舗■

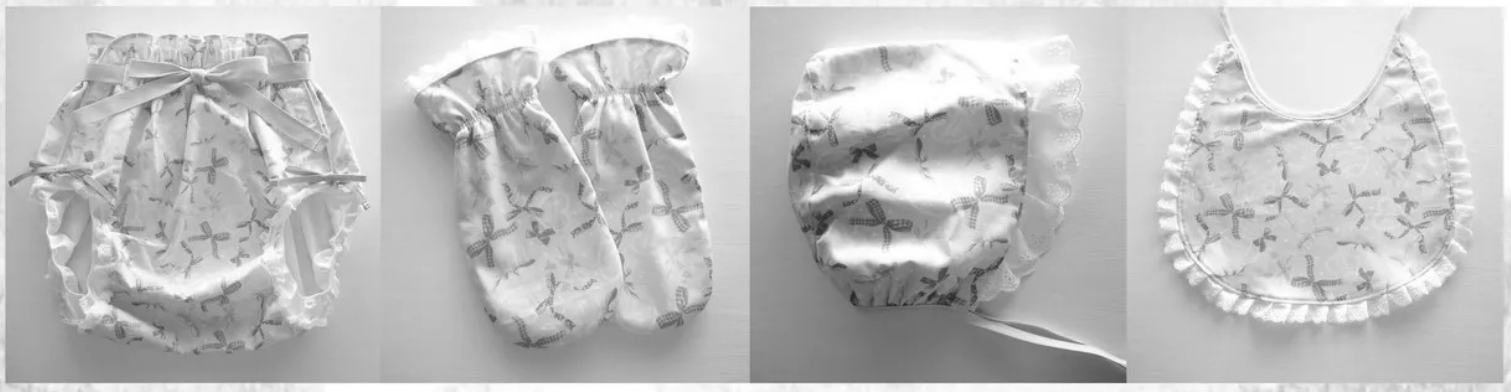
☆秋葉原ラブメルシー☆
〒101-0021 東京都千代田区外神田1-2-7
JR秋葉原駅 電気街口出て徒歩1分

☆DEEP☆
〒 460-0013　名古屋市中区上前津1-3-14
名古屋地下鉄上前津駅７番出口スグ

☆利根書店　深谷店本館☆
〒366-0033 埼玉県深谷市国済寺577-1
国道17号沿い　いっちょう様向かい
最寄駅：JR高崎線　深谷駅から2km
最寄IC：花園IC

☆大人のおもちゃ通販大魔王様☆
※通販のみ

■コラボレーション■
☆三和出版☆



http://fb.omport.cc/

『おむ☆フェス6』アフターレポート（2020年9月27日開催）

おむつっ娘プチオンリーイベント第6回目『おむ☆フェス6』は、 サンシャインクリエイション2020 Autumnにて開催されました。簡単ではありますが、アフターレポートとして内容をご紹介します。

◆開催場所：池袋サンシャインシティ　文化会館２階（Ｄホール）
◆プチオンリーイベントの『おむ☆フェス』はＤホールでの開催
◆ 参加サークル：400以上のサークル（おむ☆フェス6参加サークル６サークル）

今回のサンシャインクリエイションは、春の開催分が8月に延期開催となったため、2ヶ月連続での開催となりました。イベントが開催されたのは、COVID-19の新規感染者数は落ち着きを見せ、イベントの開催制限の緩和や東京都からの旅行制限も緩和されてきた時期でした。

イベントの感染症対策として、下記の対応がありました。
・参加サークル数の制限　・1スペースあたりの面積増加　・サークル間に衝立の設置
・入場時の検温、リストバンドによる入場者管理　・リストバンドによる入場制限(12:00で入れ替え)

開催中の様子ですが、次のような感じでした。
・一般参加者数は従来よりはかなり少なく感じました。
・11:00-12:00前売り入場＋当日販売の一部が入場、12:15～当日販売＋全員が入場
・12:00で前半の入場者の入れ替え
・入れ替えのタイミング(12:00-12:15)でサークル参加者は休憩時間がとれました。
・サークルスペースはかなりゆったりと広く、机と机の間隔も広く取られました。
・来場者1人1人と丁寧に交流する時間がありました

今後も皆様に安心して楽しんでいただけるイベントになるよう続けていきたいと思います。
どうぞよろしくお願いします。



①合同誌表紙/蜜姫モカ様



②看板娘/コンドル様



③おむ☆フェス準備委員会のスペース


④会場の様子



⑥おむ☆フェス6お土産セット(Aセット)



⑦おむ☆フェス6エア参加セット(Bセット)



⑤プチオンリーのれん/蜜姫モカ様

今回は、情勢により、サークル・一般ともに参加できない方が多くいらっしゃいました。
そこで、「イベント参加サークル様」「イベント非参加サークル様」から、頒布物をお預かりして、委託(セット)販売をしました。

おむ☆フェス7

開催記念合同誌をご発行
誠におめでとうございます！

このコロナがまだ流行ってる、大変な一年間、
日本の方から沢山の支援をいただきました。
特に数万回分のワクチンです。



台湾でいる私たちが
心より感謝しております！

今年も合同誌に
参加させていただきありがとうございます！
変な日本語ですみません…

星山カケル

①星山カケル　④2616722　⑤kakeru_jean

あとがき

①P.N　②サークル名
③HPアドレス
④Pixiv　⑤twitter

（昭和58年って
もう紙おむつ普及していたか…？）
そう思った結果急遽布に変更、あうあう
このご時世ですが【おむ☆フェス7】の
開催、おめでとうございます！
ワクチンが間に合わなかったので
今回も委託でエア参加してまーす！！
テーマは『育て直し』です！
赤ちゃんからです！



サークル：幼海エーリアン
うみノ爬虫類

①うみノ爬虫類　②幼海エーリアン
④12366173　⑤umityanADS

Presented by ジョン・マロ
John.Maro



①ジョン・マロ　④14598663　⑤culimaro



①瑞光ちのん　②はだあしや　④145724　⑤tinonn

初めて合同誌に参加させて頂きました。
日向あおいと申します。
普段はＣＧ集的な物をＤＬ販売という
形で発表しています。おむつ絵メイン
での活動では無いですが、
おむつシーンは多めに描いております。
ＰＩＸＩＶ等でサンプルの公開も
しているので、是非ご照覧下さい。
さて、今回の絵ですが、自分、
「妙齢の女性のおむつ」に萌える性質
でして、こんな感じになりました。
共感して下さる方がいるといいな…
それでは、ありがとうございました。

①日向あおい　②B-DASH　JUMP　④1935432　⑤ah0i

ファンタジー世界におむつ……
そういうのも良いもんだと思うんですよ。

やっぱり、ダンジョンとかにはトイレも無いですし、
強い敵と戦ってる間はおしっこもできないし……。
寧ろ、ファンタジーの世界にこそ、
おむつは必需品というか、
あってしかるべきだと思うんですよね！



というわけで、そんな感じのRPGを裏で
作り続けているビアードです。
完成は……ごめんなさい、
まだまだ先になります……。

Ci-enでたまーに情報公開したり
していますのでよろしければ。
https://ci-en.dlsite.com/creator/1418

①ビアード ④877149 ⑤isima_taku

祝！第七回おむ☆フェス開催

皆様こんにちは、God Hand Marです。おむ☆フェスの開催が７回目を迎えました。７と言えば幸福の数字です。縁起がいいですねぇ。しかし、世の中の状況はあまりよくありません。コロコロめ！ そんな中でも開催してくれた主催者様には感謝の言葉をいくら捧げても足りません。本当にいつもありがとうございます！ 私は前述の理由により今回もおむ☆フェスは不参加です。来年こそは参加して会場を大いに盛り上げたいもんです。

さて、今回のイラストではクラスのカースト上位に居るイジメっ子の二人に酷い目に合ってもらいました。イジメは絶対に許しません！もしオムツを着けている子が居たら優しく接してあげましょうね。

この二人のその後は今回主催者様に委託した作品に同梱しているおまけのチラシにちょっとだけ載せてます。手に入れた方は探してみてください。

①God Hand Mar ②God Hand Mar
④1435719 ⑤God_Hand_Mar

はじめまして。スメルミコトと申します。
PIXIV FANBOXを中心に活動している、小説・ゲーム・音声シナリオ書きです。プレイ用の大きなピンクの布のようなものより日常一般的な紙おむつを選んだのは、個人的な好みです。また自分で買って観察できるようにするためもありました。紙幅の関係で大小のシーンを書き終えるのが精一杯でしたが、楽しんでいただければ嬉しいです。また何かの企画の際に皆様と御一緒出来たらと願っています。

ツイッター：@ekimemoaka2019
ピクシブID：41696956
ファンボックス：
https://smell-mikoto.fanbox.cc/

①スメルミコト ③https://smell-mikoto.fanbox.cc/
④41696956 ⑤ekimemoaka2019

今回も私の話には救いがありません。最初は首輪につながれた女の子が保育園の子供たちの前で漏らすだけの話だったはずなのですが…（それも酷い）

by ラッセルヘッド％サンクリ参加できてたらいいなぁ

①ラッセルヘッド ⑤russellheadd3

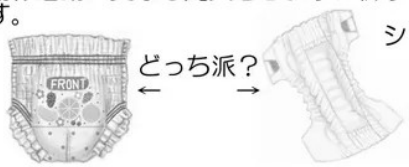


①蜜姫モカ ②Teamはれんち ④58815 ⑤Mituhime_G
③http://58niconico.web.fc2.com/

サキュバスのローザ「ねぇ、見て見て～！
サキュバス用おむつだよ！ほ～ら、おしっこ
すると淫紋が光っておしっこサインになるんだよ！
かわいいでしょ～？」

皆様、毎度お世話になっております。
『おむ☆フェス7』の開催を心よりお祝い申し上げます。
この度もカラーイラストで参加させて頂き、誠に有難うございます。
また、我ながらおバカなシチュエーションを考えてイラストにしてしまったものですw
今回の娘も私の看板娘キャラの一人の「ローザちゃん」のサキュバスバージョンです。

今後のイベントは、疫病などの不安要素が極力少ない万全なコンディションで開催できること、そして皆様のご健康と創作活動の更なる充実を心よりお祈り申し上げます。



ショタT督

①ショタT督 ④657971 ⑤T_Yasagure

最近、Dom/Subユニバースにハマってます。
設定を最初見たとき、「これはおむつっ娘のための設定かー!!!!」って興奮しました（笑）
…でも、作品数がとっても少ないです…
メインはBLですが、NLも稀に見かけます。男性向けは見つけられませんでしたorz
もっと作品増えてください、お願いします!!

①平野月子　②Sugar Baby
④9757041　⑤hiranotsukiko

おむ☆フェス７のプチオンリーのれんのイラストですが、白雪姫をイメージして描いてみました!!
が、着色した後、お洋服の配色が上下逆だったかも…？と気づいてしまいました……でも、こっちのほうが何かしっくりくる気がしてそのままです（笑）

①雛良　②e.g.g.　④2236047　⑤sula_twi

おむ☆フェス7 プチオンリーのれん



おむ☆フェス７
2021autumn

イラスト:雛良

おむつっ娘Party!7

おむつっ娘プチオンリーイベント『おむ☆フェス7』開催記念合同誌

編集後記

こんにちは。平野月子です。このたびは、おむ☆フェス7開催記念合同誌『おむつっ娘PARTY!7』をお手に取っていただきありがとうございます。

今回はようやくイベント開催7回目。目標の10回までにまた一歩近づくことができました。前回のイベント開催から約1年、変わったこと・変わらなかったこと、色々あったと思います。残念ながら、今年も抽選会等の大きな企画はできませんでしたが、確実に一歩ずつ明るい未来は近づいていると思います。次回はまた、より大勢の皆様と楽しく過ごす時間を持てればと思います。

いつもおむ☆フェスに参加してくださっている方、今回、初めてこの合同誌・イベントに参加してくださった方、おむ☆フェスを通しておむつっ娘というジャンルを知ってくださった方、そしてこの場を提供してくださったクリエイション事務局の皆様。今回も多くの方に支えられてこのイベントを開催することができました。このイベントが皆様の新しい出会いへの懸け橋となれば幸いです。このたびも、『おむ☆フェス7』に関わってくださった、支えてくださった全ての方に、感謝の気持ちを込めて。

2021.11.14　平野月子

奥付

■誌名■
「おむつっ娘PARTY!7」
おむつっ娘プチオンリーイベント
おむ☆フェス7開催記念合同誌

■企画・編集・発行■
平野月子［おむ☆フェス準備会］

■おむ☆フェス公式サイト■
http://omufes.web.fc2.com/

■「おむつっ娘PARTY!7」特設サイト■
http://omufes.web.fc2.com/omparty7/

■発行日■
2021.11.14
おむつっ娘プチオンリーイベント「おむ☆フェス7」
（サンシャインクリエィション2021 Autumn内開催）

■印刷■
オレンジ工房.com様

おむつっ娘Party!7

おむつっ娘プチオンリーイベント『おむ☆フェス7』開催記念合同誌

